

第5章 考察

第1節 南原千軒遺跡における縄文時代の遺構・遺物について

(1) 出土土器の編年的位置づけについて

今回の調査で検出された縄文時代の遺構はSI5のみである。出土土器をみると、全体形を窺える資料はないものの、第8図5、6、9、10では磨消縄文を描く沈線が途切れており、特に5、6では文様の末端が入り組み状を呈している。これらは「中津式」あるいは「福田K式古段階」にみられる特徴である(泉・玉田1986、玉田1989、柳浦2000)。また、磨消縄文帯の幅が10mm前後とやや狭い点、同図7のように底部近くまで文様が施される点、同図11にみられる鉤状J字文に近いモチーフなども、中津式の新しい段階以降に顕著な特徴である。これらのことから、SI5出土土器は全体として中津式の新相に位置づけられるものと考えられる。

遺構外からも多数の縄文土器片が出土したが、図化できたのはごく一部である。厳密な統計をとっていないが、量的には中津式が主体を占める。図示したものについては、SI5出土土器と同様に中津式の新相に相当するものが多いように思われる。

中津式以外では、前期の爪形文土器(第35図108:北白川下層 a式、第49図180:北白川下層 a~b式、第86図261:羽島下層 ~北白川下層 式) 後期前葉~中葉(第12図12:崎ヶ鼻式~沖丈式) 後期中葉~後葉(第12図13・第28図86:元住吉山式併行)の土器を確認している。

(2) 竪穴住居跡について

中津式期の竪穴住居であるSI5は、長軸5.25m、短軸約3.6mの楕円形を呈し、床面中央からやや偏った位置に石囲炉が設けられている。ただし、この平面形態と規模については拡張・建て替えの結果である可能性が高い。中津式期の住居跡は、鳥取県内で確実なものは智頭枕田遺跡(智頭町)で調査されている。ここで

第26表 鳥取県内の縄文時代竪穴住居跡は、当該期の住居形態の特徴として平面が方形ないし長方形、中央に石囲炉ないし埋甕炉をもつ、主柱は2本、掘り込みが浅い、などが指摘されている(木田・酒井2004)。SI5と比較すると、は一致するが、は相違点である。県東部の智頭枕田遺跡例に限らず、中西部の後期の住居跡をみても(第26表)、森

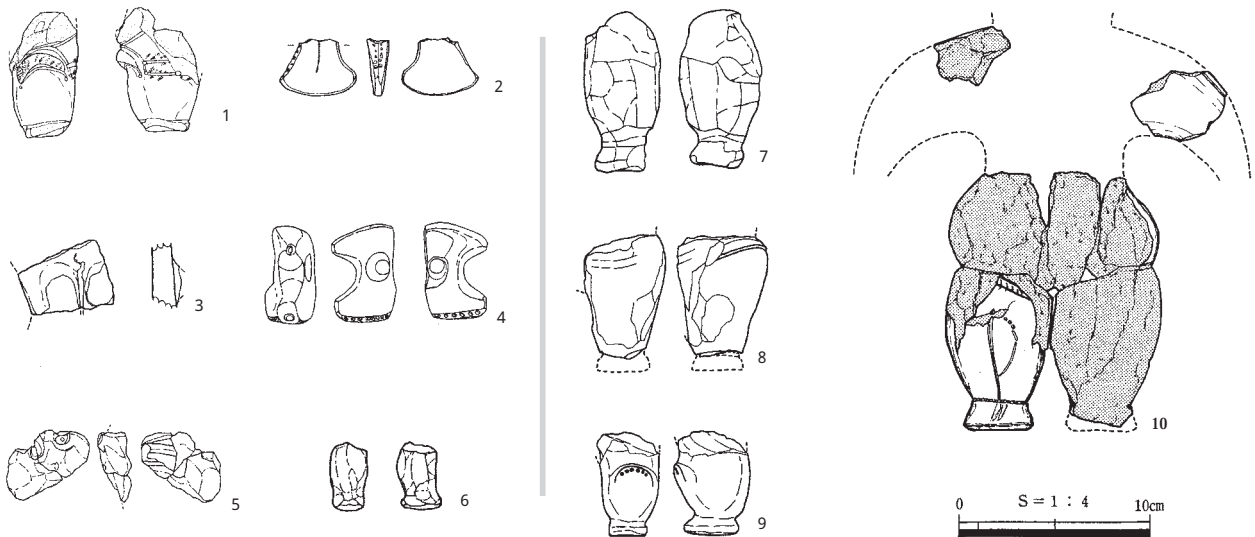
番号	遺跡名	遺構名	所在地	平面形態	時期	備考
1	取木	竪穴状遺構	倉吉市	方形	早期(大川式)	張出部あり
2	泉中峰・泉前田	SK 9	米子市	円形	早期	
3	智頭枕田	竪穴状遺構	八頭郡智頭町	不整円形	早期(高山寺式)	
4	長山馬籠	J SI01	西伯郡伯耆町	楕円形	前期初頭(長山式)	
5	長山馬籠	J SI02	西伯郡伯耆町	楕円形	前期初頭(長山式)	
6	智頭枕田	SI 1(旧)	八頭郡智頭町	方形	中期末	石囲埋甕炉
7	智頭枕田	SI 4	八頭郡智頭町	方形	中期末	石囲炉
8	智頭枕田	SI 8	八頭郡智頭町	長方形	中期末	石囲炉
9	智頭枕田	SI 5	八頭郡智頭町	方形	中期末~後期初頭	石囲炉
10	智頭枕田	SI 6	八頭郡智頭町	(長)方形	中期末~後期初頭	石囲炉
11	智頭枕田	SI 7	八頭郡智頭町	?	中期末~後期初頭	石囲炉
12	智頭枕田	SI 1(新)	八頭郡智頭町	長方形	後期初頭(中津式)	石囲炉
13	智頭枕田	SI 9	八頭郡智頭町	長方形	後期初頭(中津式)?	
14	智頭枕田	SI10	八頭郡智頭町	?	後期初頭(中津式)	石囲炉
15	智頭枕田	SI12	八頭郡智頭町	長方形	後期初頭(中津式)	石囲炉
16	智頭枕田	SI13	八頭郡智頭町	?	後期初頭(中津式)?	
17	智頭枕田	SI14	八頭郡智頭町	?	後期初頭(中津式)	石囲炉
18	南原千軒	SI 5	東伯郡琴浦町	楕円形	後期初頭(中津式)	石囲炉
19	南川	縄文後期住居跡	西伯郡大山町	?	後期前葉(福田K式)	石囲炉
20	横峰	5号竪穴住居跡	倉吉市	?	後期前葉(福田K式)?	地床炉
21	森藤第2	竪穴住居跡1号	東伯郡琴浦町	隅丸方形	後期前葉(布勢式)	石囲炉
22	森藤第2	竪穴住居跡2号	東伯郡琴浦町	隅丸方形	後期前葉(布勢式)	石囲炉?
23	智頭枕田	SI 2	八頭郡智頭町	?	後期前葉(縁帯文)	石囲炉
24	津田峰	3号住居跡	倉吉市	方形	後期前葉(崎ヶ鼻式)?	石囲炉
25	百塚第7	SI01	米子市	方形	後期前葉(崎ヶ鼻式)	地床炉
26	大下畑	SI27	米子市	?	後期前葉(崎ヶ鼻式)	地床炉
27	大塚	縄文住居跡	西伯郡大山町	円形	後期	石囲炉
28	久古第3	1号竪穴住居	西伯郡伯耆町	円形	晩期(滋賀里 a式)	
29	智頭枕田	竪穴住居	八頭郡智頭町	円形	晩期(突帯文)	5軒程度

藤第2遺跡、津田峰遺跡など方形プランが多いようである。濱田竜彦は、山陰東部における隅丸方形プランで石囲炉をともなう住居跡について、後期前葉に近畿地方を經由して波及してきたこと、その分布が典型的な布勢式土器の分布域と重なることを指摘している（濱田2000）。今回の調査は布勢式の分布域に石囲炉の1例を追加したことになるが、異なる平面形態の背景については類例の増加を待って再検討したい。

(3) 土偶について

表土中から土偶の脚部片が出土した。土偶は、県内ではこれまでに5例が出土している（第27表）。そのうち3例は、西日本に広く分布する「分銅形土偶」である。本遺跡出土例は、天白遺跡例（三重県）更良岡山遺跡例（大阪府）佃遺跡例（兵庫県）など、「今朝平タイプ」（原田1995）と呼ばれる一群に類似する。伊藤正人によれば、今朝平タイプは「東海地方（伊勢湾周辺）を中心に分布する、縄文時代後期中葉～後葉の顔のない伸身像土偶」（伊藤1998）である。最大の特徴は顔面表現の無いこととされており、この点において、脚部のみの本遺跡例を今朝平タイプと断定することは適当ではない。ただし、脚部に限定しても、特徴的な足首の括れは先述の3例と共通しており、前面に隆帯を貼付して膝？を表現する点は更良岡山例（第112図9）^(註)に近い。本遺跡例の特色として指摘すべきは、赤彩や刺突、沈線、縄文による文様の繁縟さであろう。

本遺跡例の時期については、相伴土器がなく決定できない。ただし、このタイプの盛行時期を後期中葉～後葉とする伊藤の年代観に従うならば、当該期の土器として本遺跡では元住吉山式併行の土器片が少量出土している。したがって、土偶の出土と合わせて、当該期の遺構が近傍に存在するものと推測される。中国地方の土偶集成（深田2002）によると、岡山県西岡貝塚の「山形系土偶」が今朝平タイプにやや類似するが、山陰地方では他に類例は見出せない。仮に本遺跡例が今朝平タイプと評価



1. 南原千軒 2. 森藤第2 3. 妻木法大神 4・5. 古市河原田 6. 古市流田 7. 天白（三重県嬉野町） 8・9. 更良岡山（大阪府四条畷市） 10. 佃（兵庫県東浦町）

第112図 鳥取県出土の土偶および類例

第27表 鳥取県内出土の土偶

番号	遺跡名	遺構名	所在地	形態	時期	文献
1	南原千軒	表土中	東伯郡琴浦町	今朝平タイプ？	後期中葉？	本書
2	森藤第2	竪穴住居1号	東伯郡琴浦町	分銅形	後期前葉（布勢式）	大賀他1987
3	妻木法大神	包含層	西伯郡大山町	分銅形	後期	岡野編2003
4	古市河原田	包含層	米子市	分銅形？	後期中葉	中森他編1999
5	古市河原田	包含層	米子市	不明	不明	中森他編1999
6	古市流田	SD 9	米子市	脚部片	晩期中葉～後葉？	濱田他編2000

できるならば、日本海側での分布の西端となる可能性がある。当該期の地域間交流を考えるうえで貴重な例であり、今後さらに検討を進めていきたい。(君嶋)

【註】更良岡山例、佃例については、大野薫が今朝平タイプと関連するものと評価している(大野2002、2003)。

【引用・参考文献】

- 泉 拓良・玉田芳英 1986 「文様系統論 縁帯文土器」『季刊考古学』17、雄山閣
 伊藤正人 1998 「今朝平タイプ土偶覚書」『三河考古』11、三河考古刊行会
 大賀靖浩・米原公子 1987 『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
 大野 薫 2002 「大阪府更良岡山遺跡・砂遺跡の土偶」『藤澤一夫先生卒壽記念論文集』藤澤一夫先生卒壽記念論文集刊行会
 大野 薫 2003 「顔のない土偶」『立命館大学考古学論集』立命館大学考古学論集刊行会
 岡野雅則編 2003 『妻木法大神遺跡』鳥取県教育文化財団
 木田 真・酒井雅代 2004 「智頭枕田遺跡における縄文時代後期の調査」『中津式の成立と展開』中四国縄文研究会徳島実行委員会
 玉田芳英 1989 「中津・福田K式土器様式」『縄文土器大観』4、小学館
 中森 祥他編 1999 『古市遺跡群1』鳥取県教育文化財団
 濱田竜彦 2000 「大山山麓の縄文時代遺跡」『山陰の縄文時代遺跡』第28回山陰考古学研究会集事事務局
 濱田竜彦他編 2000 『古市遺跡群2』鳥取県教育文化財団
 原田昌幸 1995 『土偶』日本の美術345、至文堂
 深井明比古編 1998 『佃遺跡』兵庫県教育委員会
 深田 浩 2002 「中国地方の土偶について」『下山遺跡(2)』鳥根県教育委員会
 柳浦俊一 2000 「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『鳥根考古学会誌』17、鳥根考古学会
 山田康弘 2002 「中国地方の縄文時代集落」『鳥根考古学会誌』19、鳥根考古学会

【挿図の出典】

第112図：1. 本書 2.(大賀・米原1987) 3.(岡野編2003) 4・5.(中森他編1999) 6.(濱田他編2000) 7.(伊藤1998) より再トレース 8・9.(大野2002) より再トレース 10.(深井編1998)

第26表は、(濱田2000)(山田2002)を参考に作成した。智頭枕田遺跡のデータは、(木田・酒井2004)および木田真氏、酒井雅代氏の御教示に拠る。

第2節 南原千軒遺跡における弥生時代の玉作について

(1) 南原千軒遺跡出土の玉作関連遺物(第113図)

玉未成品：管玉未成品と考えられる碧玉が5点出土した。J1、J2、J3の3点はSD2から、J5、J6は遺構外から出土した。J1～J3は産地分析の結果、菩提、女代南B群に属することが判明した。J1、J2、J5、J6には施溝痕がみられ、施溝分割技法を用いていたことがわかる。また打割分割技法によるJ3もあり、2種類の技法の存在が確認できた。

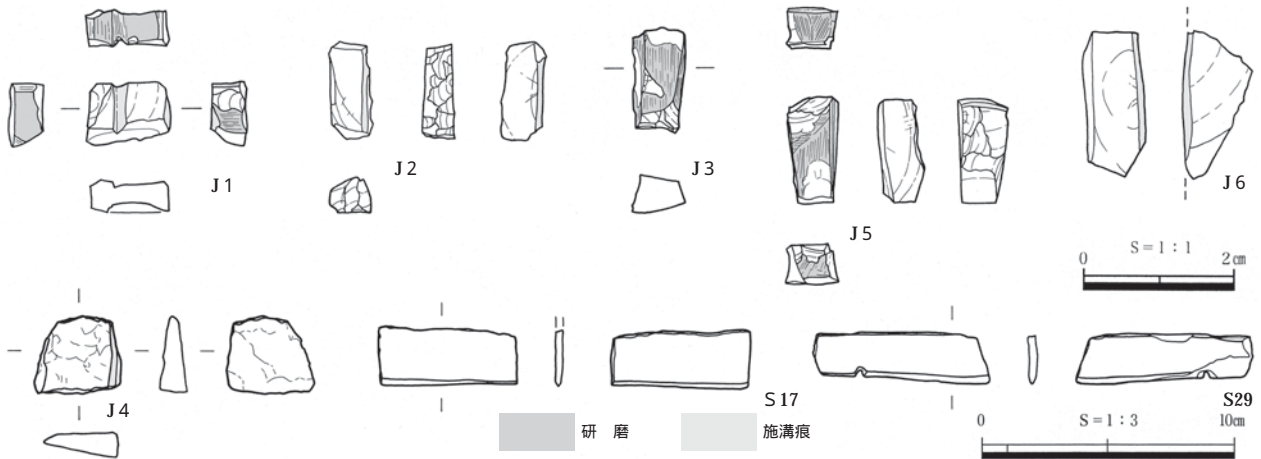
翡翠は遺構外から2点出土し、うち1点は糸魚川産と判明した。図示したJ4には、碧玉と同様に施溝痕がみられ、勾玉の未成品と考えられる。

工具：施溝時に使用されたと考えられる石鋸が2点あり、S17はSK20から、S29は遺構外から出土した。産地は不明であるが、S17は石英片岩製、S29は結晶片岩製である。他に砥石も出土しているが、玉作との関連は明確でないためここでは扱わないこととする。

本遺跡では玉作関連遺構そのものは検出していないが、石鋸S17が出土したSK20の時期から、弥生時代中期前葉から中葉頃には玉生産を開始していた可能性が高い。

(2) 鳥取県における玉作関連遺跡(第28表)

鳥取県内の主な玉作関連遺跡を参照して、玉作の様相を概観する^{註1)}。玉素材の分割技法に着目してみると、長期間一貫して施溝分割技法を用いる青谷上寺地遺跡があるものの、全体的な傾向としては、中期後葉に施溝分割技法、後期後葉に打割分割技法がみられる久蔵峰北遺跡のように、後期に技法の主体が打割分割技法に移る様子が看取できる。また石材産地については、自然科学分析が行われ



第113図 南原千軒遺跡出土の玉作関連遺物

た例が多くないため明確にはいえないが、後期になると産地が女代南B群のものだけではなく、島根県玉湯町の花仙山産碧玉も使用されている^{註2)}。

当該期の翡翠製玉未成品の出土例は、県内は他にみられず、島根県八束郡鹿島町の堀部第2遺跡の溝状遺構（後期末～古墳時代初頭）から翡翠原石が1点見つかった。正式報告がなされていないため詳細は不明であるが、本遺跡の翡翠と同様、施溝痕がみられるようである（丹羽野・深田2004）。以上のとおり、山陰地方での出土例は、管見によれば本遺跡を含めて2例しか確認されていない。

石鋸は、3遺跡で確認され、西高江遺跡^{註3)}は石材が不明であるが、青谷上寺地遺跡からは雲母片岩製、妻木晩田遺跡からは紅簾片岩製と考えられる石鋸が出土している。

(3) 玉の生産と流通

先述したとおり、本遺跡での玉作の開始時期は弥生時代中期前葉から中葉頃と考えられる。また、打割分割技法の存在から、少なくとも後期に至るまでの、長期間にわたって玉作が行われていたと想定される。

翡翠は、糸魚川産であることから北陸地方から直接的あるいは間接的に入手したもので、日本海沿岸における翡翠の流通ルートを考える上で貴重な発見である。本遺跡例は遺構外出土のため時期は特定できないが、北陸地方で翡翠勾玉生産遺跡の分布が拡大し、生産量が増加する時期は中期後半とされる（浅野2003）。その見解に従うならば、山陰地方ではわずかししか出土していない翡翠を入手できるほどの集団が、中期後半以降に本遺跡周辺に存在した可能性が高い。

次に工具である石鋸は、当地方では産出しない石材である雲母片岩や、紅簾片岩などの結晶片岩製石鋸が他遺跡にみられた。そのような石材の産地や、入手経路など検討すべき問題が残されているが、本遺跡でも同様の結晶片岩製石鋸を使用しており、遺跡単位を越えた共通性がみられる。また石庖丁が石鋸に転用される場合も想定されており（丹羽野2004）、施溝分割技法と密接に関わる施溝具について、石材、使用痕などに注意を払う必要があるだろう。

本遺跡での玉作は、中期以降継続的に行われ、石材と技法の点で、同時期の他の玉作関連遺跡と同様の傾向をみせる。翡翠を入手するなど他遺跡にみられない活発な交流を行っていたことが窺える反面、出土した資料数や当該期の遺構数が少ない点をどのように考えるかは、今後の周辺の調査をまっけて検討したい。

断片的な資料であるため、遺物の性格付けが不安定な感は否めないが、今回の発見によって当地域の玉生産研究がより深まることを期待したい。

（山根）

第28表 鳥取県内の主な弥生時代玉作関連遺跡

遺跡名(所在地)	出土遺構	種別	石材(産地)	分割技法	関連石製品	時期	備考/文献
南原千軒遺跡 (東伯郡琴浦町光)	SD2・3	未成品	碧玉(女代南B)	施溝、打割		～終末	本書
	遺構外	未成品・剥片	碧玉(女代南B)・翡翠(糸魚川)	施溝	石鏝	-	
	SK20	-	-	-	石鏝	中期前葉～中葉	
秋里遺跡 (鳥取市江津～秋里)	遺構外	未成品・剥片	碧玉・緑色凝灰岩・石英安山岩	打割	砥石・敲石?	後期後葉	原田雅弘1990『第3節 管玉未成品について』『秋里遺跡(西皆竹)』鳥取県教育文化財団
	布勢第2遺跡 (鳥取市布勢)	SI02	未成品・剥片	緑色凝灰岩	打割?	砥石	後期初頭 中野知照ほか1981『布勢遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団
青谷上寺地遺跡 (鳥取市青谷町青谷)	遺構外	未成品・剥片	碧玉	施溝	砥石・石鏝	前期末～古墳前期初頭	湯村功編2002『青谷上寺地遺跡4』鳥取県教育文化財団
長瀬高浜遺跡 (東伯郡湯浜町長瀬)	SI131	未成品・剥片	碧玉	打割	石鏝	前期中葉～後葉	鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡』
	SI156	未成品・剥片	碧玉	打割(輪切施溝)	砥石・石鏝・臺状石製品	前期中葉～後葉	鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡』
	SI158	未成品・剥片	碧玉	打割(輪切施溝)	石鏝	前期?	
	SI169	未成品・剥片	碧玉	打割(輪切施溝)	石鏝	前期中頃	
西高江遺跡 (東伯郡大栄町由良)	竪穴住居1号	未成品	水晶	打割	砥石・石鏝?	中期後葉～後期前葉	清水真一1981『東高江・西高江遺跡発掘調査報告書』大栄町教育委員会
	竪穴住居2号	未成品	水晶	打割	筋砥石・砥石		
	竪穴住居3号	未成品	碧玉・水晶	施溝(碧玉)? ・打割(水晶)	石鏝		
	竪穴住居4号	未成品	水晶	打割	砥石		
	竪穴住居6号	未成品	水晶	打割	敲石		
	竪穴住居7号	未成品	水晶	打割	敲石・砥石・石鏝		
	竪穴住居8号	未成品	碧玉・水晶	施溝(玉)・水晶(打割)	砥石・石刀?		
笠見第3遺跡*1 (東伯郡琴浦町笠見)	SI34	未成品・剥片・ガラス小玉	緑色凝灰岩・碧玉(女代南B)・ガラス	打割	筋砥石	後期中葉	大半が緑色凝灰岩
	SI49	管玉・未成品・剥片・ガラス小玉	緑色凝灰岩・碧玉(花仙山・女代南B)・ガラス	打割	砥石・敲石・擦石	後期前葉	碧玉は大半が女代南B群
久蔵峰北遺跡*2 (東伯郡琴浦町八橋)	SK32	石核	緑色凝灰岩	施溝	-	中期後葉	
	SI40	勾玉	翡翠(糸魚川)	-	-	後期後葉	
	SI58	未成品・剥片	水晶・碧玉(花仙山・女代南B)・緑色凝灰岩	打割	敲石	後期後葉	碧玉は大半が花仙山産
妻木晩田遺跡 (西伯郡大山町長田・淀江町福岡)	妻木新山地区 第51竪穴住居	未成品	緑色凝灰岩	?	-	後期前葉	松本哲ほか2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会
	松尾頭地区 第31竪穴住居跡	未成品・剥片	碧玉・黒曜石	打割?	筋砥石	終末	
	洞ノ原地区 住居1	剥片	碧玉・水晶	?	穿孔針素材?(珪化木)	終末 ～古墳前期初頭	高田健一2003『第5節 玉作り関連遺物』『史跡妻木晩田遺跡 第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会
	遺構外	未成品	緑色凝灰岩	施溝	石鏝	?	

* 1 牧本哲雄編2004『笠見第3遺跡』鳥取県教育文化財団

* 2 小山浩和他編2004『久蔵峰北遺跡・娘谷遺跡・岩本遺跡』鳥取県教育文化財団

【註】

- (1) 県内の玉作関連遺跡については、増田浩太氏が体系的に整理されているので参照されたい(増田2004)。
- (2) 打割分割技法や、硬質の花仙山産碧玉の採用については、「後期に入って急速に普及する鉄製工具との関連性」が指摘されている(増田2004)。ただし花仙山産碧玉に比べ、軟質の女代南B群石材の使用も古墳時代中期まで続く(米田2000)。
- (3) 調査担当者も述べているが、出土した石鏝は厚く、形割り時にタガネとして使用された可能性がある。

【参考文献】

- 浅野良治 2003 「日本海沿岸における翡翠製勾玉の生産と流通」『富山大学考古学研究室論集 歴気楼』六一書房
- 丹羽野裕・深田浩 2004 「玉作遺跡 調査表」『古代出雲における玉作の研究』鳥取県教育委員会・鳥取県古代文化センター
- 丹羽野裕 2004 「松江市西川津遺跡における弥生時代管玉製作技術の再検討」『古代出雲における玉作の研究』鳥取県教育委員会・鳥取県古代文化センター
- 増田浩太 2004 「鳥取県の玉作関連遺跡」『古代出雲における玉作の研究』鳥取県教育委員会・鳥取県古代文化センター
- 米田克彦 2000 「碧玉製管玉の分類と碧玉原産地」『古代吉備』第22集、古代吉備研究会

第3節 南原千軒遺跡SK2の出土遺物について

(1) 和鏡

SK2から出土した和鏡は鏡背面に山吹と鳥を対称構図に配置した山吹双鳥鏡である(第114図)。

直径8.1cm、鏡胎厚1~2mm、外区幅2~3mm、外区厚5mmを測る。鏡胎は全体に薄く平坦で、周縁は外傾気味に立ち上がる。鏡背の中央には半球形の鈕があり、その側面に半円形の孔が貫通する。

鏡背文様は全体に鑄上がりが悪いため、肉眼観察では不明瞭な部分が多い。鏡背界圏から鈕寄りにかけての内区には、二羽の鳥と二輪一對の山吹が鈕を中心に対称構図で描かれる。鳥は頭部・胸部・尾部・翼部がそれぞれ独立して表現される。尾部が若干長めであることから、尾長鳥であろうか。いずれも外向きに羽ばたいており、翼にはわずかではあるが羽根の表現が確認できる。山吹は折枝の先端に五弁の花弁を飾る。花弁は一重で、蕊は認められない。また、折枝の先端に葉をあらわすものもあるが、花弁とは異なり立面で表現される。外区に描かれた山吹も同様に立面で表現される。鈕座は抜菊座となる。

山吹双鳥鏡の類例(第115図)として島根県鰐淵寺例があげられる。仁平二(1152)年の銘をもつ湖州鏡と仁平三(1153)年の銘をもつ経筒とともに蔵王窟から出土したものである。

このほかには京都府鞍馬寺例がある。本堂北方の経塚周辺から出土したもので、本来は経塚から出土した治承三(1179)年の銘をもつ経筒に伴うものである。

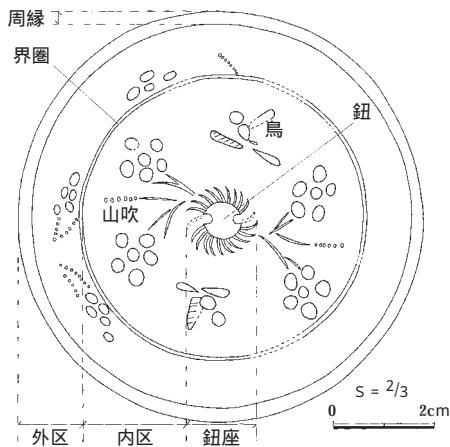
久保智康の論考(久保1997・1999)にみる平安時代後期(12世紀)の和鏡の変遷的特徴を上述の三者にあてはめると、いずれも幅2~3mmで外傾気味の周縁を持つ類中縁鏡に相当する。~類の中で類がもっともポピュラーな和鏡で、12世紀全般を通して製作される。

鏡背文様を見ても、三者とも描かれる山吹と鳥が対称構図を取っていることから、山吹に樹枝が加わった梅樹表現を採用するようになる12世紀第4四半期までは降らないであろう。

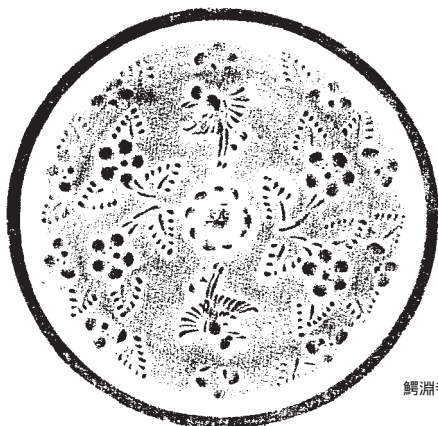
外区の山吹と折枝文の立面表現も共通しており、三者に見られる文様の相違点は鈕座表現のみである。南原千軒遺跡例、鰐淵寺例は抜菊座で、前者は細弁表現、後者は幅広で高肉の表現である。いっぽう、鞍馬寺例は低い花蕊座となる。

抜菊座は12世紀第2・3四半期に多く、類細縁鏡に伴う

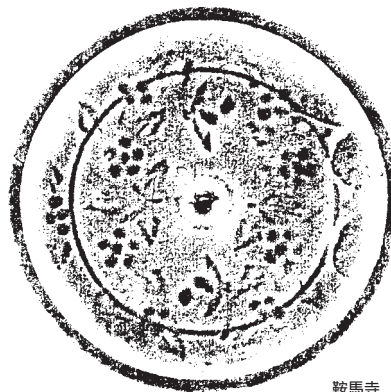
特徴なので、その影響のもとに製作された可能性が想定される。花蕊座は12世紀後半に多く見られるようである。以上のことから経筒に紀年銘を持つ二者は12世紀中頃、同様に南原千軒遺跡出土例もほぼ同じ時期に製作されたと見てよい。



第114図 SK2出土和鏡背面復元図
および部位名称

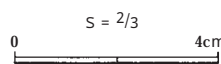


鰐淵寺



鞍馬寺

第115図 山吹双鳥鏡の類例



(2) 輪状鉄製品

SK2からは和鏡のほか輪状鉄製品が出土した。いびつな楕円形を呈するものが多いが、本来は円形をなしていたものと思われる。直径は15cm前後に復元でき、合計4個体分を数える(第116図)。

同様の鉄製品は島根県吉佐山根1号墳のSK01から出土している^{註)}(錦田他1995)。SK01は1号墳の墳丘北西側墳裾の西隅部に隣接する土壌墓で、土壌内からは鉄製の刀子1点、鈴5点、環状製品2点が出土した(第117図)。環状鉄製品は断面が直径約6~7mm。環状をなす直径は21cm前後に復元できる。表面に繊維状のものが巻きつけられていた。出土状況から判断して、本来は直立し、2点が1対をなしていたようである(第118図)。調査担当者は、それらがあるものの両端に直立する「輪っか」もしくは枠がつく構造を持つものであるという推測のもと、「枠付き締め太鼓」を想定した。鈴と共伴していることから楽器である蓋然性は高いようである。

今回、南原千軒遺跡から出土した輪状鉄製品は吉佐山根1号墳SK01出土例に比べ、ひと回り小さいものであるが、所々に螺旋状に巻きつけた繊維状の付着物が残存していること、また輪状鉄製品が対をなすような出土位置にあることなどはきわめて似た状況である。本遺跡出土例を吉佐山根1号墳SK01の類例と認めるならば、これまで明確でなかった吉佐山根1号墳SK01の時期も平安時代後半まで下げて考えてよいのではないか。

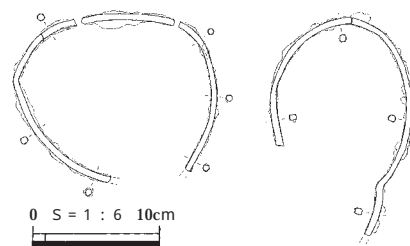
さて、南原千軒遺跡SK2に葬られた人間像であるが、鏡を伴っていることから判断して女性である可能性が高いであろう(秋山1999)。また、SK2からの出土ではないが、SK2北東のP351(第85図)からは内面に赤色顔料が付着した青白磁合子の蓋(258)が出土している。SK2は全体に残りが浅く、遺構の上面が大きく削平を受けている可能性が高いことから、258も本来はSK2に伴う副葬品であったかもしれない。

このように見たとき、輪状鉄製品も女性的な要素を示す副葬品となるのであろうか。今後の資料増加に期待したい。(西川)

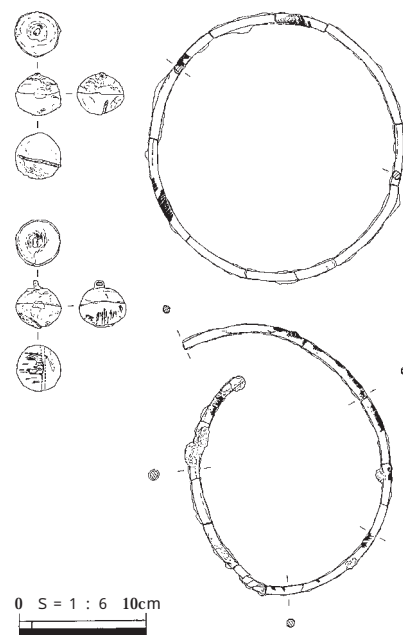
【註】松本岩雄氏の御教示による。

【参考文献】

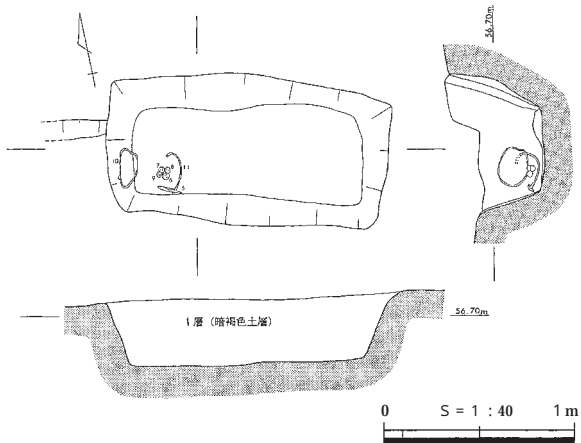
秋山浩三 1999 「古代の男性墓・女性墓 - 奈良・平安時代墳墓の副葬・伴出品にみる性差 -」『古代文化』51 - 12、古代学協会
 久保智康 1997 『京都国立博物館蔵 和鏡』京都国立博物館
 久保智康 1999 『中世・近世の鏡』日本の美術394、至文堂
 錦田剛志・丹羽野裕・岩橋孝典 1995 『平ラ 遺跡 吉佐山根1号墳 穴神横穴墓群』島根県教育委員会
 広瀬都巽 1938 『扶桑紀年銘鏡図説』大阪市立美術館学報1
 【挿図の出典】第115図：(広瀬1938) 第117・118図：(錦田他1995)
 いずれも改変して引用



第116図 SK2出土輪状鉄製品



第117図 島根県吉佐山根1号墳SK01出土鉄製品



第118図 島根県吉佐山根1号墳SK01遺物出土状況

第4節 南原千軒遺跡の掘立柱建物について

(1) SB1の出土銭貨について

南原千軒遺跡SB1の4か所の柱穴からはそれぞれ一枚ずつ銭貨が出土した。P1・P5・P8は礎盤石の上面で、柱を立てるとほぼ同時に納められ、P11は柱を立て、掘方埋土を何度か埋め戻している段階で納められた。いずれの柱穴も柱を立てる作業の中で銭貨を納めており、すべて身舎に伴うものであるのが特徴的である。掘立柱建物での地鎮に関わる銭貨の埋納例は県内ではこれが初例となる(中森1999・2004)。

全国的な視野に立つと銭貨を伴った地鎮遺構は多数の出土例があり、様々な埋納方法もうかがえる。銭貨を伴った地鎮遺構の分類に関しては嶋谷和彦の論考(嶋谷1997)があり、それを参照すると南原千軒遺跡SB1は「銭貨のみが単独で出土するもの」に相当する。以下に関連する遺構に関して若干の検討を試みる^{註1)}(第29表)。

まず、柱を立てるとほぼ同時に銭貨を納めたものには福岡県大宰府条坊跡や高知県具同中山遺跡群^{註2)}(筒井編2001)がある。前者は根石あるいは礎盤石を据える直前か柱を立てる前後に銭貨を納めている。後者の柱穴口2の出土状況は南原千軒遺跡SB1のそれと類似する。また建物の平面形式をみても身舎の(二2~6、八2~6、口2~6)西側と南側に、矩折れに取り付く廂をもつ可能性があり、興味深い。今後、建物の詳細な検討が必要であろう。

次に銭貨が建物のどの柱穴に納められているのかをみていくと、当遺跡では身舎の北東隅(P1)とその対角線に位置する柱穴(P8)、そしてその両側(P5・P11)に納められている。

陰陽道では災いの多い方角として北東方向を鬼門、その反対の南西方向を裏鬼門とし、忌み嫌う方角とみなしてきた。掘立柱建物の柱穴に銭貨を埋納したのは、それらの位置を意識していたためではないかという見方もある(海邊・渡邊2004、大庭1999、西尾2004)。以下、それに関連する例を列挙する。

鬼門の位置に対応しているのは岡山県百間川米田遺跡の建物148。裏鬼門に対応しているのは山口県下右田遺跡で、かつ棟持柱の位置にあたる。また徳島県円通寺遺跡・神宮寺遺跡・薬師遺跡、愛媛県南久米町遺跡では裏鬼門に対応する柱穴に共通して開元通寶が納められる。そして鬼門と裏鬼門の両方に対応するのが島根県渡橋沖遺跡である。ただし、その方位は厳密ではない。

このほか岡山県百間川米田遺跡の建物164や岩手県泉屋遺跡15次調査SB17などはいずれにも該当しない。先述の徳島県薬師遺跡でも裏鬼門に対応する出土例のほかに、南棟持柱・南東隅の柱穴からの銭貨出土例も見られる。一概に建物の北東側に納められた銭貨を鬼門、南西側のものを裏鬼門という解釈で片付けてしまった場合、これらの埋納銭貨にはどのような意義付けをするべきか、南原千軒遺跡出土例も含め、今後の検討課題であろう。

今調査区でもう1棟検出されたSB2からは全く地鎮の痕跡は認められなかった。一方、SB1の南東に位置するSK10では多量の土器が廃棄されており、明確ではないが別の作法による地鎮あるいは祭祀の可能性が想定される。ひとつの屋敷地内において、建物の規模や性格の違い、あるいは土地そのものを対象とした場合ではそれぞれ地鎮作法を使い分けているのかどうかということも念頭に入れながら、今後も調査を進めていく必要がある。

(2) SB1・2の建物復元

SB1・2は調査当初の段階では、2間×2間の身舎に1間の廂が取り付く、2棟の建物が双堂の

第29表 銭貨出土掘立柱建物の類例

県名	遺跡名	時期	遺構名	柱穴の位置・性格	埋納位置	銭種
福岡	大宰府条坊跡(140次)	13~14C	SB010	Pc・e(南西)・f・g・h	掘方底面近く	c:元祐通寶 e:元祐通寶 f:皇宋通寶 g:嘉祐通寶 h:元祐通寶
高知	具同中山遺跡群()	13~14C前	SB1	八2・口2(南西)	掘方底面近く口2は 礎盤とともに出土	八2:天禧通寶 口3:皇宋元寶
山口	下右田遺跡(3次)	中世	SB17	PH8棟持柱(南西)	柱穴内	太平通寶、洪武通寶 ほか8枚
島根	渡橋沖遺跡	13~14C	SB01	P359(北東) P213(南西)	柱穴内	P359:宋通元寶 P213:元豊通寶
岡山	百間川米田遺跡	鎌倉時代後半	掘立柱建物148	柱穴6(北東)	柱穴内	景德元寶2、天聖元寶
"	"	鎌倉時代	掘立柱建物164	柱穴3(南)	柱穴内	皇宋通寶、聖宋通寶
徳島	円通寺遺跡(小山地区)	14C	SA1019	P1598(北東寄り)	掘方埋土	元祐通寶、政和通寶
"	神宮寺遺跡	13前~16C	SA1011	柱穴(南西隅)	柱穴内	開元通寶
"	薬師遺跡	14~16C	SA1014	柱穴(南西隅)	柱穴内	開元通寶
"	"	"	SA1002	柱穴(南東隅)	柱穴内	洪武通寶
"	"	"	SA1010	柱穴(南)棟持柱	柱穴内	銭種不明
愛媛	南久米町遺跡(2次)	9~11C	掘立柱建物1	柱穴(南西隅)	柱穴内根石の下層基底部	開元通寶
岩手	泉屋遺跡	15C	15 SB17	P359	掘方埋土中位	天聖元寶、元豊通寶

ごとく並列したものであると捉えていた。

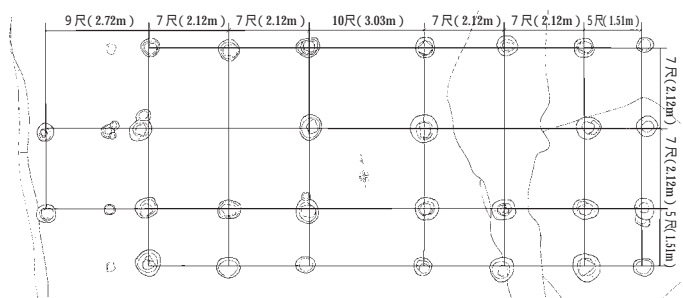
しかしSB1の西面で身舎に伴う柱穴(P17・18)を、また東面では南面から連続する廂(P19~22)を確認したことから、桁行中央間が広がる形式の建物であると判断し、同様にSB2も西面に廂を持った、桁行中央間が広がる形式の建物とした。

まず、それぞれの柱間寸法を復元する。遺構検出面では柱穴の掘方から多くの柱痕跡を確認した。その柱痕跡をそのまま柱列として結んでいくと、柱筋が通らない所が多くなる。これは必ずしも真直ぐな柱材ばかりを使用していないこと、また桁材あるいは梁材と組み合う上部での調整の結果が反映されたものと理解しておく。礎盤石の位置が高くなるSB1のP13や二段重ねにしたSB2のP13なども、上部での長さを揃えるための微調整であったことを物語る。よって、小屋組みにおいて整った数値の尺度で組み合っているという前提で柱間寸法を推定する。

1尺=30.3cmとしてみた場合、SB1は第119図のようになる。P15のように約1尺ずれるものもあるが、全体的に見て柱筋ともほぼ対応しているので、妥当なものであると判断したい。

次にSB2であるが、身舎の平面形式はSB1と同様なので、その尺度をあててみた(第120図)。桁行方向の柱掘方にはかなりばらつきが見られ、SB1ほどの対応関係は認められないが、全体でのバランスを考慮するとすれば、身舎に関しては同様の尺度であったと見るべきであろう。廂部分に関しては柱位置から判断してSB1より1尺長い6尺であったと考えられる。

次に柱配置から平面形式を復元すると、SB1は身舎 廂 下屋の大きく3つの空間に分けることができる。については柱位置から見て少なくとも3部屋に仕切られていた可能性がある。は軒先に向かって柱間寸法が身舎より2尺短くなり、南東側で隅をなす。については北端と南端の桁行の延長上で同様の柱穴が検出できなかったことから判断した。このことから西妻側に差し掛けが設けられ、そこが入り口となったのであろう。また、そのように考えた場合、P14~16・28の西側に対応する小ピット、あるいは平坦面を持つ石のある位置が縁束に相当すると考えられ、北面を除いた

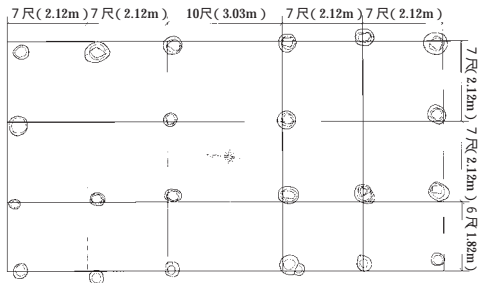


第119図 SB1柱間寸法復元図(S=1/200)

身舎の周囲には縁板が貼り巡らされていた可能性が高い。しかし、身舎内では床束の痕跡を全く認められなかったため、さらに想像を逞しくしてしまうが、縁板があるとすれば、床板も当然あったものと見てよいのではないだろうか。上屋に関しては後述する。

次にSB2であるが、遺構面があまり良好に残存してなかったこともあり、SB1と同様の身舎を持ち、西側に廂をもつということ以外は不明確である。礎盤石の可能性のあるP161（第84図）などを尊重すれば、北面に下屋が存在したとも想定できるであろう。また南面のP131・133・135・137なども桁行方向の柱筋に対応していると看取できるが、これらの掘方埋土の断面観察では柱痕跡や抜き取り痕跡も認められず、しまりのない埋土であったことから、建物には直接関連しないものと判断した。床面の有無に関しても、先述のように残りが悪いため、保留としておく。

さてSB1とSB2の両者の関係であるが、前者が東西棟、後者が南北棟の建物で、それぞれの軸線の交わる角度は80°をなし、直交しない。また柱穴の底面の標高から判断する限り、両者には大きな

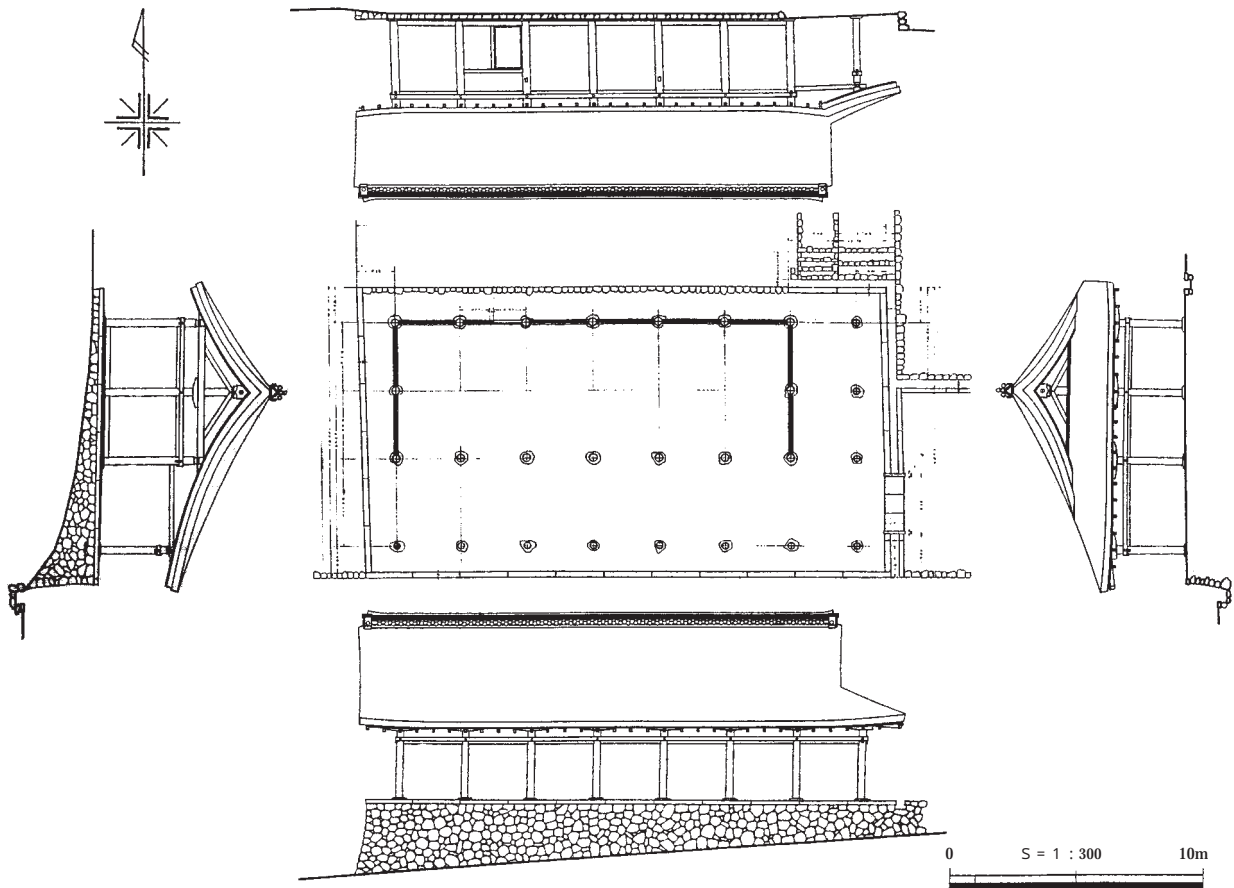


第120図 SB2柱間寸法復元図 (S = 1/200)

差はなく、本来はほぼ同じ高さの地表面に立てられていたものとみてよい。

同時併存していたかどうかは明確にはいえないが、掘方埋土に含まれる遺物に大きな時期差がないこと、柱抜き取り穴がほとんどないことから、移築等、建て替えの可能性は低いと考えられる。

次にSB1の上屋構造の復元を考える上での参考例とし



第121図 奈良春日大社到着殿 平面図および立面図

て、奈良県春日大社着到殿をあげる^{註3)}。この建物は延喜十六(916)年に造立され、現存するものは応永二十(1413)年に建立されたものが、いく度かの修造を経たものである。正面7間、側面3間の檜皮葺礎石建物。正面6間、側面2間の身舎の南側と東側へ矩折れに1間通りの廂を付けた形式である。

上屋は切妻造りの身舎に廂屋根が取り付いた形で、東妻は入母屋造り、西妻は流れ造りという特異な形式である(第121図)。

建物の下部構造や規模、柱配置などはSB1と異なるが、矩折れの廂を持つ建物の屋根形態および隅軒の納め方を考える上では重要な参考資料となるであろう。(西川)

【註】

(1) 以下、報告書の出典がないものは(出土銭貨研究会四国ブロック編2002)を参照した。

(2) 池澤俊幸氏から御教示を得た。

(3) 箱崎和久氏から御教示を得た。

【参考文献】

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書』

大庭俊次・間野大丞・足立克己 1999 『渡橋沖遺跡』島根県教育委員会

岡本寛久編 1989 『百間川米田遺跡(旧当麻遺跡)3』岡山県教育委員会

海邊博史・渡邊淳子 2004 「讃岐における地鎮めの様相」『2004年出土銭貨報告会』発表資料

嶋谷和彦 1997 「中世の“地鎮”と銭貨」『出土銭貨』7、出土銭貨研究会

出土銭貨研究会四国ブロック編 2002 『中世の地鎮と銭貨』出土銭貨研究会

筒井三菜編 2001 『具同中山遺跡群』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

中森 祥 1999 「鳥取県下の出土状況」『出土銭貨』11、出土銭貨研究会

中森 祥 2004 「地鎮にかかる銭貨・鳥取県」『山陰の出土銭貨』出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局

西尾克己 2004 「地鎮にかかる銭貨・鳥根県」『山陰の出土銭貨』出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局

山口県教育委員会 1980 『下右田遺跡第4次調査概報』

【挿図の出典】

第121図：『重要文化財春日大社本社宝庫・車舎・着到殿修理工事報告書』奈良県教育委員会事務局・奈良県文化財保存事務所1966より一部改変して引用

第5節 南原千軒遺跡における中世初頭の鉄生産について

本遺跡では、鉄関連遺構を検出していないものの、非常に多くの鉄関連遺物が出土した。出土遺構の時期から、鉄生産は中世初頭(12~13世紀)を中心として行われていたと考えられる。本節では、当該期における鳥取県内の製鉄関連遺跡を概観し、本遺跡の鉄生産の性格を明らかにしたい。

第30表 鳥取県内の中世製鉄関連遺跡

遺跡名(所在地)	鉄関連遺構	鉄関連遺物	出土点数/総重量 (単位はg)	時期	文献
南原千軒遺跡 (東伯郡琴浦町光)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・椀形鉄塊・鉄塊系遺物・炉壁・羽口・鉄製品ほか	627/98395.8	12~13世紀 (7世紀?~)	本書
円護寺坂ノ下遺跡 (鳥取市円護寺)	炉壁集積遺構・ 鋳型溜・鍛冶炉	椀形鍛冶滓・粒状滓・鍛造刮片・羽口・炉壁・ガラス質滓・ 鋳型・鉄製品	?/10728	13世紀前半	谷口恭子・稲浜隆志編2000 『円護寺坂ノ下遺跡』鳥取市 教育福祉振興会
大河原遺跡 (倉吉市関金町山口)	製錬炉・精錬鍛冶 炉・鍛錬鍛冶炉	製錬滓・精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓・炉壁	??	16世紀	日野琢郎 1985 『大河原製鉄遺跡発 掘調査報告書』関金町教育委員会
観音堂遺跡 (倉吉市関金町松河原)	-	鍛冶滓・羽口・台石	4~/?	12~13世紀	日野琢郎 1993 『観音堂地区』 『関金町内遺跡群発掘調査報告 書』関金町教育委員会
押平弘法堂遺跡 (西伯郡大山町押平)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・羽口・鉄製品	23~/2259.8~	鎌倉前期	八峠興編 2002 『茶畑六反田 遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡 播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』 鳥取県教育文化財団
茶畑六反田遺跡 (西伯郡大山町茶畑)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・羽口・鉄製品	17~/723.4~	鎌倉	
茶畑六反田遺跡 0区 (西伯郡大山町茶畑)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・羽口・鉄製品	12~/755.2~	12世紀	
茶畑六反田遺跡 0区 (西伯郡大山町茶畑)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・鉄製品	14~/643.5~	15世紀前半~	中森祥編 2004 『茶畑六反田 遺跡(0・5区)』鳥取県教育 文化財団
茶畑六反田遺跡 0区 (西伯郡大山町茶畑)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・羽口	8~/125.7~	16~17世紀初頭	
霞牛ノ尾遺跡 B地区 (日野郡日南町霞)	-	流出孔滓・椀形鍛冶滓・流動滓・鉄塊系遺物・ 再結合滓・炉壁・羽口・炉壁石・鉄製品ほか	117~/57900.5~	中世~	中森祥・濱隆造・森田結城 2001 『霞遺跡群』鳥取県教育文化財団

管見によれば鳥取県内における中世の製鉄関連遺跡は6遺跡確認できる^{註1)}(第30表)。炉跡などの遺構が確認されているのは、円護寺坂ノ下遺跡、大河原遺跡の2遺跡で、他の遺跡は本遺跡と同様、鉄関連遺物が出土しているのみである。

本遺跡で出土した鉄滓は、含鉄鉄滓が非常に少ない点が特徴的である。この含鉄鉄滓の割合について、西伯郡大山町の名和衣装谷遺跡(平安初期)では含鉄鉄滓の占める割合の高さから、同遺跡において鉄の流通管理が行われていたと考えられている(湯川2003)。含鉄鉄滓が鉄素材として流通していたのか、精錬鍛冶工程の段階で金属鉄を残しつつも廃棄されたものなのか判断は難しい。いずれにせよ本遺跡では、含鉄鉄滓の占める割合の低さから、鉄素材あるいは鉄製品の製作まで組織的に行われていたと考えられる。また各遺跡の鉄製品を除く鉄関連遺物の出土点数・総重量をみると^{註2)}、本遺跡と霞牛ノ尾遺跡B区が群を抜いている。他の遺跡では集落内での小規模な鍛冶が行われていたと想定されるが、特に本遺跡の場合、それらの遺跡に比べ大規模な操業で、12世紀以降にみられる鉄の量産化(角田2004)に対応したものと考えられ、他地域への供給を行っていた可能性も推測できる。

鳥取県の中世製鉄関連遺跡は、旧関金・三朝両町を中心とした東伯郡の山間部・海岸部の西伯郡旧名和町周辺・日野郡一帯に分布しているが、今回の調査によって、本遺跡が位置する東伯郡の海岸部でも本格的な鉄生産が行われていたことが明らかとなった。また、伯耆国では鉄を貢納していた荘園がいくつか知られており、これらと鉄生産遺跡をどのように関連づけられるかが今後の重要な研究課題となろう。

近年琴浦町では、時期は異なるものの新たな製鉄関連遺跡の発見が相次いでおり^{註3)}、本遺跡の南側調査区外に存在する可能性が高い鍛冶遺構等が確認されれば、当地域における鉄生産の様相がより一層明らかになることが期待される。(山根)

【註】

- (1) 県内の中世製鉄遺跡については松之舎文雄氏が整理している(松之舎2004)。
- (2) 鉄製品については、各遺跡の鍛冶工程の所産のもの判断しかねる例が存在するため除外した。また、本遺跡は全出土資料のデータであるが、他の遺跡は主に図示した資料のデータであるため、厳密な比較はできない。ただし、大まかな傾向は把握できる。
- (3) 八橋第8・9遺跡：小口英一郎編 2003 『八橋第8・9遺跡』鳥取県教育文化財団
別所中峯遺跡：大野哲二編 2004 『松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡』鳥取県教育文化財団
中道東山西山遺跡：高尾浩司編 2005 『中道東山西山遺跡』鳥取県教育文化財団

【参考文献】

- 角田徳幸 2004 「中国地方における古代末から中世の精錬鍛冶遺跡」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会
- 松之舎文雄 2004 「鳥取県の中世製鉄遺跡」『中国山地の中世製鉄遺跡』第32回山陰考古学研究会事務局
- 湯川善一 2003 「まとめ」『名和衣装谷遺跡・古御堂金蔵ヶ平遺跡』鳥取県教育文化財団

第6節 南原千軒遺跡出土の古代・中世の土器について

今回の調査では、古代・中世、特に12世紀～13世紀代に位置づけられる土器が多量に出土した。これらの土器について、以下に若干の整理を試みる。

(1) 古代の土器について

8・9世紀代の土器がSD1、SD6から出土している。8世紀代に位置づけられるものは須恵器坏(SD1:126)、須恵器高台坏(SD6:135、136、SD7:142)、須恵器皿(SD6:137)などである。これらは底部回転系切であり、高広編年 期(8世紀中葉～9世紀前半)に相当する。また、SD9からは須恵器長頸壺底部(182)が出土しており、同 B期(7世紀末～8世紀前半)に遡る可能性がある。注目される遺物として、鉄鉢形須恵器(SD1:128)、朱墨付着の坏(SD1:126)がある。

9世紀代に位置づけられる土器として、赤色塗彩、底部回転ヘラ切りの特徴をもつ坏、皿が出土し

ている（SD 1 : 131、132、SD 6 : 140）。これらは伯耆国庁編年2段階（9世紀）に相当する。

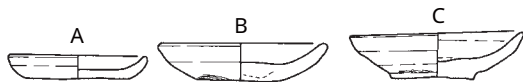
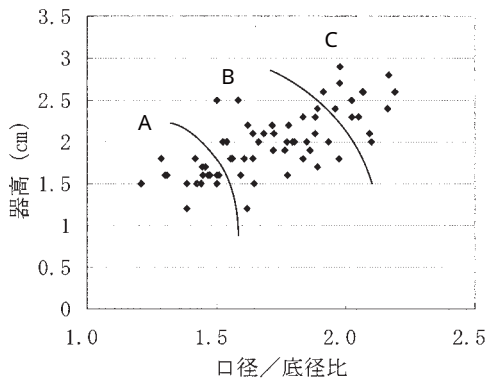
これらの遺物はSD 1・SD 6の埋土中から混在して出土しており、これらの溝が9世紀代に埋没したことを示している。今回の調査では8世紀代の遺構は検出されていないが、本調査地から勝田川を挟んで対岸に位置する八幡遺跡では、飛鳥・奈良時代の総柱掘立柱建物跡や、畿内系土師器、墨書土器、転用硯などが発見されており、官衙関連施設としての性格が想定されている（野口編2005）。本調査地における鉄鉢形須恵器や朱墨付着土器の出土から、本調査地の近傍にもこれと関連する遺構が存在したことが想定される。

（2）中世土器の器種分類

中世初頭の土器は、底部回転系切の土師器を主体として各遺構から多量に出土している。この中には、SK10・SK12出土土器のように、一括して廃棄されたと考えられる良好な資料も含まれる。

まず、土師器の器種について以下のように整理する。

- ・ 坏 口縁部が直線的に広がるもの（A）と内弯するもの（B）、器高が低く皿に近いもの（C）がある。



第122図 小皿の分類

ある。A類、B類の底部はいずれも回転系切である。坏B類には、外面にナデ調整による凹凸が段状に残るものが多い。

- ・ 皿 いわゆる小皿が主体である。法量を基準として以下のとおり分類する（第122図）^{註1)}。

A : 器高1.8cm未満、口径／底径比1.5未満。 B : 器高1.8cm～2.2cm、口径／底径比1.5～1.9。 C : 器高2.3cm以上、口径／底径比2.0以上。

- ・ 柱状高台坏・皿 底部回転系切で柱状の高台をもつ坏、皿である。完形のものはないが、八峠興の分類^{註2)}

	高台坏	坏	皿・小皿	柱状高台皿	煮炊具	
中世	米子城跡21遺跡SK32 	B 			甕A 	
	SK10 	B 	C 	B 	B 	
	SK12 			坏B 	C 	
期	打塚遺跡土壇状盛土 					
					甕B 	鍋
期	0 S = 1 : 8 20cm 			SK9 	SD4 	SI31

第123図 中世土器の変遷

第31表 遺構別出土土器集計表

遺構	坏			底部	皿			柱状高台			甕		鍋	羽釜	須恵器 壺・甕	陶磁器		
	A	B	C		A	B	C	B	B	坏B	A	B				白磁	青磁	その他
SI2	1			1	1	2				C						1	1	
SB1				2	1								2		1		1	
SB2				1	1													1
SK1				1	1						1							
SK3				1														
SK5					1											1		
SK6		1		2														
SK7						1											2	
SK9														1				
SK10	2	2	1	5		2	4	1				2						
SK11				1														
SK12				1		5			2	1								
SK13					1										1			1
SK14					1													
SK15	1			1	3										1			
SK18		1		2	1													
SK21		1		2														
SK22	1			2										1				
SD4				1	1	1						1	1	1			3	
SD5																		1
SD7		1		1	2	4		1				1	1				2	
SD8				1													1	

による皿 B類、 B類、 C類、 坏 B類を確認できる。

・煮炊具 全体形を窺えるものはないが、甕、鍋、羽釜が出土している。甕は土師質で、ゆるく外反して直線的な体部につながるもの（A）と、口縁部が「く」字状に外反するもの（B）とがある。鍋は土師質と瓦質がある。土師質は受け口状のもの（SB1：117）と「く」字状に外反するもの（SD7：161）がある。瓦質のものは小片だが、口唇部が小さく外反して面をもつ（SB1：119）。羽釜は土師質である（SD4：170、SK9：199）。

土師器の他に須恵器、輸入陶磁器が出土している。須恵器は、全体形を窺えるものとして遺構外出土の壺284がある。遺構出土のものには壺、甕と思われる破片があり、そのうちSK13出土の破片は胎土分析により勝間田産と推定された（第4章第2節参照）

輸入陶磁器には完形のものはないが、白磁、青磁片が出土している。白磁は 類、 類の碗がある。青磁は白磁と比べるとごく小数であり、かつ小片のみであるが、龍泉窯系と考えられる破片が出土している。その他に、褐釉陶器と考えられる破片や、青白磁合子の身と蓋が1点ずつ出土している。

（3）中世土器の編年的位置づけ

第3章の事実報告においては、これらの出土土器を八峠中世 期（12世紀）ないし中世 期（13世紀）に位置づけたが、上述の器種分類を踏まえ、ここで改めて整理する。第31表は、出土した土器の器種、分類を遺構ごとに示したものである^{註3)}。SK10などを除いて厳密な共伴関係を示す資料は少なく、また出土した遺物のすべてを図化しているわけではないのでおおまかな傾向を示すに過ぎない。

さて、中世 期と 期とを分期する基準は必ずしも明確ではないが、煮炊具では中世 期になると羽釜、受け口状口縁の鍋が出現する。また輸入陶磁器では、中世 期には白磁主体であった組成が、 期にかけて青磁が増加し、やがて龍泉窯系青磁が中心となる傾向が指摘されている。

この編年観に則してみると、中世 期に位置づけられるのはSB1・SD4・SD5・SK9である。SB1からは受け口状口縁土師質鍋、瓦質鍋、外面に蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗が出土している。SD4からは土師質羽釜が出土している。また、浅い溝であるため一括性は疑問であるが、甕A類、白磁碗 類、瓦質の羽釜脚部かと思われる破片が含まれる。なお、SB1とSD4とは切り合い関係にあり、前者が後出する。

良好な一括資料と評価できるSK10・SK12は中世 期に位置づけられる。伯耆の中世 期の資料として、八峠編年（八峠2004）では米子城跡21遺跡SK32、打塚遺跡土壇状盛土出土資料が例示されており、編年表の配列からは後者が新しく位置づけられているようである。SK10とSK12出土資料は、小皿や柱状高台皿の形態が打塚出土資料に近い様相を示している（第123図）。ただし、SK10・SK12、打塚出土資料は、小皿B、C類の組成に違いがある。すなわち、SK10・打塚出土例はB、C類を含

むがSK12はC類のみである。ここで示したA～C類の法量差、形態差が時期差を示すものと立証されれば、出土量の多い小皿は当該期編年の基軸となることが予想されるが、今回は十分な分析を果たせなかった。後考を期すことにしたい。

以上、SK10・SK12を中世 期に、SB1・SD4・SD5・SK9を中世 期に位置づけた。これら以外の遺構については、土器の出土点数が少ない、あるいは小片であるなどの理由から時期判断の難しいものが多いため、～ 期と幅を持たせて把握しておきたい。

今回の調査を含め、当該期の資料は近年急速に蓄積が進んでおり、土器編年も整備されていくものと期待される。その成果如何によっては、現状の編年観に基づく各遺構の評価に変更が生じる可能性もあることを付記しておく。(君嶋)

【註】

- (1) 本遺跡出土の実測図掲載資料に、サンプル数を確保するため打塚遺跡土壇状盛土内出土土器、大日寺遺跡遺構外出土土器(ともに倉吉市)を加えた上でグラフを作成した。総サンプル数は70である。倉吉市の2遺跡出土資料の法量は報告書記載の実測図から計測したものである。
- (2) 類：器高が低く、台部は円盤高台状で低い。 A類：接地面からそのまま開くもの、または円柱状の高台をもつもの。
B類：接地部から内傾して立ち上がるもの。
類：器高がやや高く、台部は外に張り出すものが多い。 A類：台部が円柱状で垂直方向に立ち上がるもの。 B類：台部が接地部から内傾して立ち上がるもの。 C類：台部の端部が一段高くなるもの。
坏(椀) A類：台が接地面から垂直方向に立ち上がる円柱状のもの。坏(椀) B類：台が接地面から内傾するもの。坏(椀) C類：台の端部が一段高く、装飾的なもの。(八峠2001)
- (3) 実測図掲載個体のみを数えたものであり、出土した土器の組成を反映しているものではない。また、口縁部、体部を欠き、坏か皿かの判断が難しい底部のみの破片については「底部」として一括している。

【参考文献】

- 真田廣幸編 1983 『打塚遺跡発掘調査報告』倉吉市教育委員会
野口良也編 2005 『八幡遺跡』鳥取県教育文化財団
森下哲哉編 1993 『大日寺遺跡群発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
八峠 興 1998 「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究』、日本中世土器研究会
八峠 興 2000 「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中近世土器の基礎研究』、日本中世土器研究会
八峠 興 2001 「柱状高台考」『中世土器研究論集』中世土器研究会
八峠 興 2004 「山陰の中世土器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』、日本中世土器研究会
湯村 功他編 1998 『米子城跡21遺跡』鳥取県教育文化財団
【挿図の出典】第123図：米子城跡21遺跡SK32(湯村他編1998) 打塚遺跡土壇状盛土(真田編1983)

第7節 南原千軒遺跡と勝田荘

南原千軒遺跡では、中世初頭(12～13世紀)の遺構が多数検出された。当該期の南原千軒遺跡の性格について、以下に考察を試みる。

(1) 中世初頭における南原千軒遺跡の空間構成

当該期の遺構として、溝(SD7など) 土坑(SK10など) 墓(SK2) 竪穴建物(SI2・4) 掘立柱建物(SB1・2)が確認された。また、遺構として検出されてはいないが、鍛冶関連施設が近傍に存在した可能性は極めて高いと考えられる。

まず、これらの遺構のいくつかについて、その性格を考えてみよう。溝SD7は、等高線に平行する直線的な走向であることから、人為的に掘削された溝と考えられる。かつ、先行するSD6・SD1とほぼ重複していることから、踏襲された地割を示す区画溝である可能性が高い。もしそうならば、SD6・SD1の埋没時期は9世紀代であることから、かなり長期間にわたってこの地割が踏襲されていたことになる。さらに溝の規模を考え合わせると、これらSD1・6・7は条里地割の坪境の溝ではないだろうか。周辺では、日野尚志によって調査地の西側に条里地割が復元されている^{註1)}(日野

1990)。SD7の方向はこの地割には一致しないが、勝田川東岸の小字界とは整合的であるように見受けられる(第125図)。このことから、勝田川西岸とは別個の条里地割が同東岸に施行されていた可能性を考えたい。また、滞水していた状況が窺えることから、用水や運河的な機能を合わせ持っていたのかもしれない^{註2)}。

掘立柱建物SB1・SB2は廂をもつ建物である。廂部分を含めた平面規模はSB1が78㎡(13×6m)、SB2が66㎡(11×6m)であり、周辺遺跡の類例と比較すれば大型の部類に属する^{註3)}。

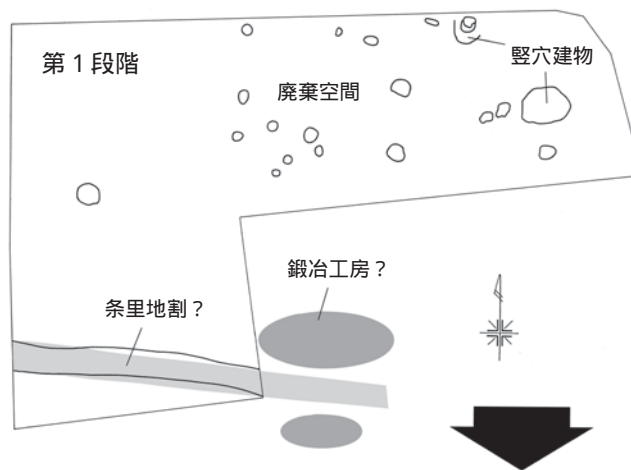
墓墳SK2は、建物SB1に近接して単独で設けられていることから「屋敷墓」の範疇で理解できる。ただし、出土した和鏡の年代観は12世紀半ば頃であり、13世紀代と考えたSB1の時期とは齟齬があるが、これについては鏡の製作・使用年代と埋葬年代との差と解釈する余地もある。

土坑の多くはその性格を充分明らかにできないが、SK10やSK12のように土師器皿を中心とする土器が多量に出土した土坑については廃棄土坑と考えられる。特にSK10出土土器には意図的な打ち欠き等が見られることから、儀礼的行為に伴い一括廃棄されたものと考えられる。

次に、中世における空間利用の変遷について整理する。本章第6節で述べたように、中世の遺構は出土遺物から中世～期に位置づけられる。中世～期に位置づけられる遺構としてSB1・SD4などがあるが、SB1はSD4の埋没後に建てられていることから、SB1が最新相を示す遺構ということになる。したがって、本調査地の空間利用については、SB1・SB2の成立を画期として以下のような2段階の変遷を想定することができる(第124図)。

第1段階(中世～期)

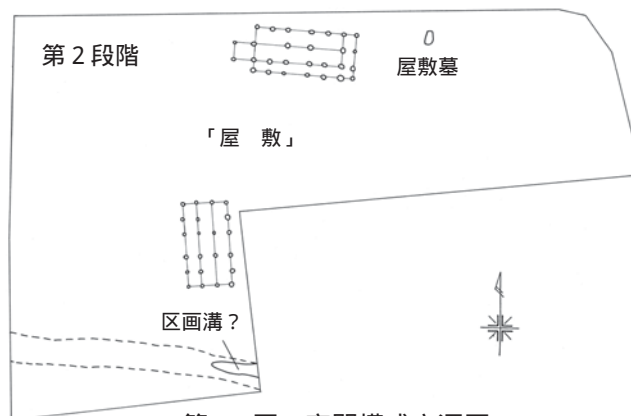
SD7は中世～期の段階で埋没が始まっていたものと考えられるが、なお区画溝として機能していた可能性もある。この段階の主要な建物はSD7の南側など調査区外に存在したものと想定される。SD7の北側にあたる調査区内には数多くの土坑が掘られており、廃棄空間として利用されていたのであろう。調査区の東側には性格不明の竪穴建物(SI2・4)が設けられる。また、SD7の北側ないし南側の調査区外には鍛冶関連施設が存在したものと推測される。



た可能性もある。この段階の主要な建物はSD7の南側など調査区外に存在したものと想定される。SD7の北側にあたる調査区内には数多くの土坑が掘られており、廃棄空間として利用されていたのであろう。調査区の東側には性格不明の竪穴建物(SI2・4)が設けられる。また、SD7の北側ないし南側の調査区外には鍛冶関連施設が存在したものと推測される。

第2段階(中世～期)

これまで廃棄空間だった調査区中央にSB1・SB2が建てられる。墓墳SK2については、先述したとおり副葬品の示す時期との齟齬があるが、屋敷墓の「被葬者が「屋敷」創設の主体者」(橘田1991)であったとする通説に従うならば、この段階に位置づけられる可能性も考えられる。SD7はほぼ埋没し、区画溝(坪境溝)としての役割を終えたものと考えられる。ただし、SD7埋没後に掘り込まれたSD



第124図 空間構成変遷図

5が新たな区画溝として機能した可能性がある。

(2) 文献史料にみる勝田荘

以上、考古学的所見に基づいて空間利用の変遷を整理した。さて、南原千軒遺跡に人々の活動の痕跡が刻まれた中世初頭、調査地周辺の勝田川流域はどのような歴史的環境にあったのであろうか。

文献史料によれば、当該期の調査地周辺には「勝田荘」と呼ばれる荘園が存在した可能性がある。鎌倉時代の公家藤原経光の日記である『経光卿記』天福元(1233)年5月の紙背文書中の年月日・氏名不詳断簡に「仰伯州勝田荘、雖為六代相伝地…去年地頭新補之上」とある。この記事から、勝田荘は承久の乱(1221年)後の地頭補任地と考えられている(錦織1999)。

勝田荘の所在地については、大別して西伯耆の会見郡説と東伯耆の八橋郡説とがある。『荘園志料』(清水・竹内1933)は会見郡、現在の米子市勝田(かんだ)周辺に比定している。田中稔も同様に会見郡とし^{註4)}(田中1970)、陶山徹も田中の説を引いている(陶山1973)。一方で、『角川日本地名大辞典31 鳥取県』(1982)および錦織勤(錦織前掲)は八橋郡、すなわち調査地周辺の勝田川流域に比定する。前者は、会見郡説への反論として『佐々木文書』所収の文和三(1354)年10月14日付足利尊氏袖判下文を引き、米子市勝田は中世には「神田庄」と表記されていたものであり勝田荘とは別であると論じる。

文和三年10月14日付足利尊氏袖判下文には次のように記されている。

「下 佐々木近江守秀綱跡 加令早領知出雲国女来庄 伯耆国小鴨次郎・同庶子等跡并蚊屋庄 城大曾祿跡 神田庄南條又五郎跡 因幡国私部郷 毛利次郎同庶子跡 事・・・(以下略)」。

この文書は、足利尊氏が、前年戦死した佐々木秀綱の遺領を氏名不詳某に与えるという内容で、その遺領の中に「神田庄南條又五郎跡」がある。この南條又五郎は、戦国期に羽衣石城(東伯郡湯梨浜町)を本拠地として東伯耆に勢力を拡大した南条氏の一族と推測される。もしそうであるならば、その遺領である「神田庄」は西伯耆よりも東伯耆にあったとする方が考えやすい。また、米子市の現行地名にみるように「かつた」と「かんだ」が通じるならば、八橋郡の勝田もかつては「かんだ」と発音されることがあったと想定される。これらのことから、南條又五郎の「神田庄」を八橋郡の勝田川流域に比定することも可能なのではないだろうか^{註5)}。

勝田荘を勝田川流域に想定した場合、地名としての「勝田」集落は、調査地のすぐ東側を流れる勝田川の上流約1.5kmに位置している。ただし、本調査地から南東へ約300m離れた勝田川の東岸に、荘園を示唆する地名である「上公文給」の小字名が残っていることから、調査地周辺が荘園に含まれる可能性は十分に考えられる。時期的には、承久の乱後の地頭補任地であり、乱以前に6代に渡って相伝されてきたとあるため、南原千軒遺跡の遺構の時期と重なりを持つことになる。

南原千軒遺跡と勝田荘を直接に結びつける証拠(墨書土器や木簡など)はない。ただし、本遺跡が勝田荘の一角を占めると仮定するならば、建物SB1や墓壙SK2、多量に出土した鉄関連遺物などの理解が容易になるのではないだろうか。SB1とSK2に関連して、屋敷墓を分析した橋田正徳は、荘園遺跡に「屋敷墓」を擁する建物群が多いこと、屋敷墓は主に百姓層(名主層)に受容されたことを論じている(橋田前掲)。SB1・2を営んだ主体の性格、階層を考えるうえで興味深い指摘である。また、今回の調査で出土した鉄関連遺物は総重量が100kg近くに達し、集落内で消費していたには多すぎる印象がある。伯耆国内では鉄を貢納していた荘園が何箇所か知られており(福田1996)本遺跡でも貢納品として鉄が生産されていたのかもしれない。

以上、南原千軒遺跡と勝田荘との関係について述べてきた。仮定に仮定を重ねた乏しい根拠に基づく見解ではあるが、仮説として提示しておき、再検討の機会を待つことにしたい。（君嶋）

【註】

- (1) また、岩永實も、笹津付近から西宮付近にかけての方格地割（N - 2° - E）の存在を示唆している（岩永1977）。
- (2) SD7の溝底には3箇所の台状の高まりが設けられていたが、長原遺跡（大阪市）の堀底にも同様な「堰状の施設」が存在し、水を滞留させて用水として利用したものと解釈されている（宇野2001）。この堀がやはり条里の坪境溝と考えられていることは興味深い。
- (3) 例えば、茶畑六反田遺跡、押平弘法堂遺跡（大山町）では鎌倉時代の掘立柱建物が多数検出されているが、最大規模の建物は約32㎡である（八峠編2002）。
- (4) ただし、田中は勝田荘を那智山領、預所は僧長庵とするが、『角川日本地名大辞典31』が指摘するとおり、長庵が預所であった勝田荘とは美作国勝田郡に所在した別の荘園であろう。
- (5) 以上、南條又五郎と神田庄を巡る論点については国田俊雄氏の御教示による。

【参考文献】

岩永 實 1977 『鳥取県地誌考』岩永實先生記念論文集刊行会
 宇野隆夫 2001 『荘園の考古学』青木書店
 橋田正徳 1991 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』、日本中世土器研究会
 清水正建・竹内理三 1933 『荘園志料』帝都出版社
 陶山 徹 1973 「第1章第3節 2. 因伯の新補地頭」『鳥取県史2 中世』鳥取県
 田中 稔 1970 「承久の乱後の新地頭補任地<拾遺>」『史学雑誌』79 - 12、史学会
 鳥取県編 1973 『鳥取県史2 中世』鳥取県
 豊島吉則他編 1982 『角川日本地名大辞典31 鳥取県』角川書店
 錦織 勤 1999 「伯耆国」『中国地方の荘園』講座日本荘園史9、吉川弘文館
 日野尚志 1990 「伯耆国の駅路について」『佐賀大学教育学部論文集』38 - 2、佐賀大学教育学部
 福田豊彦 1996 「文献からみた鉄の生産と流通」『季刊考古学』57、雄山閣
 八峠 興編 2002 『茶畑六反田遺跡 押平弘法堂遺跡 富岡播磨洞遺跡 安原溝尻遺跡』鳥取県教育文化財団
 勝田荘に関しては、国田俊雄氏、中村芳雄氏から有意義な御教示をいただいた。末筆ながら記して謝意を表する次第である。



第125図 勝田川流域の小字界と条里地割復元案（調査地西側の復元は（日野1990）による）

第32表 土器・土製品観察表

・量は最大値である。 は復元値、 は残存値を示す。・内外面で色調が異なる場合は上段に外面、下段に内面を示した。
 ・色調は、基本的に『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に拠る。・「 」は調整の順序を示す。

No.	挿図・PL	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
1	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢	口径: 38.0 器高: 23.0	胴部 1/4周	外面:磨消縄文 内面:横・斜め条痕	にぶい橙色	径2mm以下の砂礫多く混	やや不良	中津式
2	第8図 PL.22	SI5 床面直上	縄文土器 粗製深鉢	口径: 16.0 器高: 4.1	口縁部 1/5周	外面:口縁部横ナデ、胴部ケズリ様の雑なナデ 内面:横ナデ	にぶい黄褐色	径2mm以下の砂礫多く混	良好	
3	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 粗製深鉢	口径: 25.0 器高: 12.1	胴部 1/3周	外面:横・斜めのケズリ様の雑なナデ 内面:横条痕、ナデ	にぶい黄褐色	径3mm以下の砂礫多量に混	良好	
4	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 双耳壺	器高: 4.5	突起部 破片	外面:横ミガキ、磨消縄文 内面:横ミガキ	暗赤褐色	砂粒、雲母粒多く混	やや不良	後期初頭
5	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 5.8	波頂部 破片	外面:磨消縄文 内面:ナデ	橙色	砂粒やや多く混	やや不良	中津式
6	第8図 PL.40	SI5 床面直上	縄文土器 精製鉢	器高: 3.6	口縁部 破片	外面:RL磨消縄文、ミガキ 内面:ミガキ	にぶい黄褐色	径2mm以下の砂礫まばらに混	やや不良	中津式
7	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 7.7 底径:8.2	底部 完存	外面:磨消縄文、斜め条痕 内面:斜め雑なナデ	にぶい黄褐色	径2mm以下の砂礫多量に混	やや不良	中津式
8	第8図 PL.22	SI5 床面直上	縄文土器 精製鉢	胴部径:8.6 器高: 4.6	胴部 1/3周	外面:磨消縄文、横ミガキ 内面:横ミガキ、ナデ	橙色	砂礫、雲母粒多く混	やや不良	中津式
9	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 4.5	波頂部 破片	外面:磨消縄文 内面:ナデ	にぶい黄褐色	砂粒多く混	不良	中津式
10	第8図 PL.22	SI5 床面直上	縄文土器 精製深鉢		胴部 破片	外面:磨消縄文 内面:横条痕	橙色 黒褐色	砂粒多く混	やや不良	後期初頭～前葉
11	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢		胴部 破片	外面:磨消縄文 内面:横条痕	にぶい黄褐色 黒褐色	径2mm以下の砂礫やや多く混	やや不良	中津式 内面煤付着
12	第12図 PL.40	SD3 埋土中	縄文土器 精製鉢		胴部 破片	外面:RL縄文 内面:ナデ	灰褐色	白色砂粒多く混	良好	外面煤付着、後期前葉～中葉(崎ヶ鼻～沖文)
13	第12図 PL.40	SD3 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 3.4	口縁部 破片	外面:ナデ 内面:口唇部に斜め刻み、その下位を沈線1条で区画	褐灰色 オリーブ黄色	砂粒多量に混	良好	後期中葉～後葉(元住吉山式併行)
14	第12図 PL.23	SD2 埋土中	縄文土器 深鉢	器高: 2.5	口縁部 破片	外面:口縁部刻目突帯部に竹管状刺突文、胴部にも刺突文 内面:条痕	にぶい橙色	やや粗、1mm大の砂粒混	良好	凸帯文
15	第12図 PL.23	SD3 埋土中	弥生土器 壺	口径: 13.0 器高: 6.5	口縁部 1/6周	外面:ナデ 内面:コビオサエ	にぶい黄褐色	密	良好	弥生前期
16	第12図 PL.23	SD2 埋土中	弥生土器 甕	口径: 23.0 器高: 5.5	口縁部 1/4周	外面:ハケ ナデ 平行沈線 内面:ハケ ナデ	にぶい黄褐色	やや粗、1～2mm大砂粒多く混	良好	弥生中期
17	第12図 PL.23	SD3 検出面	弥生土器 甕	口径: 11.7 器高: 4.7	口縁部 1/8周	外面:平行沈線、口唇部に格子状の刻目文、上面に刺突文 内面:ナデ	にぶい黄褐色	密、砂粒若干混	良好	弥生中期
18	第12図 PL.23	SD3 埋土中	弥生土器 甕	口径: 14.4 器高: 8.3	口縁部 1/4周	外面:ハケ ナデ 内面:ナデ 胴部下半ケズリ	灰黄褐色	密、1mm以下砂粒混	良好	弥生中期
19	第12図 PL.23	SD2 埋土下層	弥生土器 壺	口径: 19.0 器高: 8.9	口縁部 1/2周	外面:ハケ ナデ 内面:ミガキ	橙黄褐色	密、1mm以下の砂粒若干混	良好	弥生後期(第 様式)
20	第12図 PL.23	SD3 埋土中	弥生土器 甕	口径: 13.0 器高: 2.2	口縁部 1/8周	外面:凹線文 内面:ナデ	橙黄褐色	密、1mm以下砂粒混	良好	弥生後期(-1)
21	第12図 PL.23	SD2 埋土中	弥生土器 甕	口径: 25.0 器高: 6.6	口縁部 1/4周	外面:ハケ ナデ、凹線文 内面:ケズリ、ナデ	暗褐色	密、1～2mm大石英、長石混	良好	弥生後期(-1)
22	第12図 PL.23	SD2 埋土下層	弥生土器 甕	口径: 19.7 器高: 6.6	口縁部 1/8周	外面:多条平行沈線 一部ナデ 内面:ケズリ、ミガキ、ナデ	淡黄褐色 灰褐色	密、1mm大砂粒混	良好	弥生後期(-3)
23	第12図 PL.23	SD2 埋土上層	弥生土器 甕	口径: 13.0 器高: 4.8	口縁部 1/8周	外面:ナデ 内面:口縁部ナデ、胴部ケズリ	橙黄褐色	密、砂粒若干混	良好	弥生終末期
24	第12図 PL.23	SD2 埋土下層	弥生土器 脚付壺	器高: 12.1	胴部下半～脚部 1/4周	外面:胴部ミガキ 内面:胴部ケズリ ナデ、脚部ナデ	橙色	密	良好	
25	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 壺	口径: 20.0 器高: 6.8	口縁部 1/6周	外面:口縁部斜格子文、頸部タテハケ以下凹線 内面:口縁部～頸部横ミガキ	にぶい橙色	密	良好	外面煤付着 弥生中期
26	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 13.7 器高: 8.5	口縁部 完存	外面:ミガキ、口縁部ナデ 内面:ナデ	淡黄褐色	やや粗、1mm大砂粒多く混	良好	
27	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 17.2 器高: 10.5	口縁部 1/2周	外面:ハケ 刺突文、ミガキ 内面:ケズリ ナデ、ミガキ	暗褐色	密、1mm大砂粒混	良好	外面煤付着 弥生中期
28	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 31.6 器高:12.3	口縁部 1/5周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ刺突文。以下横ミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、タテハケ横ミガキ	橙色	密	良好	外面煤付着 弥生中期

No.	挿図・P.L.	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
29	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 23.6 器高: 13.5	口縁部- 胴部1/4周	内外面:ハケ ナデ、ミガキ	にぶい黄褐色	密、1mm以下 砂粒若干混	良好	弥生中期
30	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 19.6 器高: 11.8	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ、その下にハケ状 工具による刺突文、タテミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部以下横ミガキ、タテミガキ	橙色	密	良好	外面煤付着 弥生中期
31	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 18.9 器高: 11.2	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ、一部横ミガキ。 その下にハケ状工具による刺突文、タテミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部以下横ミガキ、タテミガキ	にぶい橙色 黄橙色	密	良好	外面煤付着 弥生中 期 30と同一個体か
32	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 19.6 器高: 11.6	口縁部 1/4周	外面:口頸部ヨコナデ、胴部タテハケ 刺突文 内面:口頸部ヨコナデ、胴部タテハケ 下半ナデ	にぶい橙色	密、雲母粒 僅かに混	良好	弥生中期
33	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 23.0 器高: 6.8	口縁部 1/4周	外面:口縁部ヨコナデ、胴部タテ ハケ 内面:横ミガキ	黄橙色	密	良好	胴部外面煤付 着 弥生中期
34	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 17.8 器高:24.6 胴部径:17.0 底径:5.2	口縁部 3/4周	外面:口縁部ヨコナデ、胴部細かなタテハケ。下 半以下タテミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、肩 部ヨコナデミガキ、最大径以下ケズリ ナデ	橙色	密	やや不良	外面全体に煤付着。上半 部以下二次的焼熱、剥 離、底部に焼成前穿孔
35	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 22.8 器高:33.3 底径:6.3	口縁部 3/4周	外面:口縁部ヨコナデ、胴部上半タテハケ 刺突文。下半タテミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、以下タテハケ ナデ	浅黄色	密	やや不良	胴部外面黒斑、煤付着。 外面二次的焼熱。内面 下半肌荒れ。弥生中期
36	第15図 PL.25	SK4 埋土中	土師器 甕	口径: 23.0 器高: 8.6	口縁部 1/6周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部以下タテハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下右方向ケ ズリ	淡黄色	やや粗、2~5 mm大の礫混	良好	胴部外面僅か に煤付着、混 入品
37	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 壺	器高: 22.3 胴部径: 24.0 底径:8.8	底部完存 胴部1/2周	外面:タテミガキ 内面:タテハケ、底部ナデ	浅黄橙色	やや粗、2mm 大の砂粒混	良好	
38	第15図 PL.25	SK4 坑底直上	弥生土器 蓋	口径: 8.0 器高: 2.8	口縁部 1/4周	外面:細かなミガキ 内面:ナデ 細かなミガキ	黄橙色	密	良好	内外面煤付着
39	第15図 PL.26	SK4 埋土中	弥生土器 手捏ね土器	器高: 2.6 底径: 3.4	底部 1/3周	内外面:ナデ	暗褐色	密	良好	
40	第15図 PL.26	SK4 埋土中	弥生土器 壺	器高: 4.3 底径:4.5	底部 2/3周	外面:幅広のタテミガキ 内面:ケズリ	黄橙色	密	良好	外面煤付着
41	第15図 PL.26	SK4 埋土中	弥生土器 甕	器高: 5.4 底径:8.0	底部 完存	外面:タテハケ ミガキ 内面:丁寧なナデ	黄橙色	密	良好	外面赤彩
42	第17図 PL.26	SK16 埋土中	弥生土器 甕	口径: 21.4 器高: 8.6	口縁部 1/8周	外面:口縁部ナデ、頸部以下ハケ 内面:ハケ ナデ	淡橙色	密、3mm大 の砂粒混	良好	外面頸部以下 に煤付着
43	第17図 PL.26	SK16 埋土中	弥生土器 甕	器高: 3.1	口縁部 破片	内外面:ナデ 口縁部に刻み、外 面頸部下に櫛描平行洗線 6条	橙色	密、3mm大の 砂粒少量混	良好	弥生中期
44	第17図 PL.26	SK16 坑底直上	弥生土器 底部	器高: 2.7 底径:10.3	底部 完存	内外面:ナデ	赤褐色	密、砂礫 多く混	やや不良	
45	第17図 PL.26	SK16 埋土中	弥生土器 底部	器高: 4.0 底径:10.0	底部 完存	内外面:ナデ	にぶい橙色	密、砂礫 多量に混	良好	
46	第17図 PL.26	SK16 埋土中	弥生土器 底部	底径:10.8 器高: 6.2	底部 3/4周	内外面:不明	赤褐色 灰褐色	密、1~3mm大 の砂粒多く混	やや不良	
47	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 甕	器高:11.8	1/8 未満	外面:頸部ハケ、胴部ミガキ 内面:ミガキ	明赤褐色	密、3mm大の 砂粒少量混	良好	口縁部内外面 赤彩 弥生中期
48	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 甕	口径: 13.6 器高: 14.7	口縁部 1/4周	外面:ハケ ミガキ、頸部ヨコナデ 内面:ハケ ナデ、一部ミガキ	橙色	密、3mm大 の砂粒混	良好	外面口縁部・胴 部下半に煤付着
49	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 甕	器高: 4.9	口縁部 破片	外面:ハケ ヨコナデ 内面:ヨコナデ ミガキ	明黄褐色	密、1mm大 の砂粒混	良好	口唇部内外面・ 胴部に煤付着 弥生中期
50	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 甕	口径: 26.8 器高: 9.7	口縁部 1/6周	外面:ミガキ、口縁部下に5条一単 位の櫛描平行洗線 櫛描波状文 内面:ナデ	明褐色	密、1mm大 の砂粒混	良好	弥生中期
51	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 底部	底径:5.8 器高: 9.2	底部 1/2周	外面:ミガキ 内面:ナデ	浅黄色 黒褐色	密、1mm大の 砂粒多く混	やや不良	
52	第21図 PL.26	SK23 埋土中	弥生土器 甕	口径: 20.4 器高: 5.0	口縁部 1/4周	外面:ハケ ナデ 端部に刻目 内面:ナデ	にぶい黄褐色	密、1mm大 石英混	良好	
53	第21図 PL.25	SK23 埋土中	弥生土器 壺	口径: 15.4 器高: 25.8 胴部径: 17.7	口縁部 1/2周	外面:口縁部斜格子文、頸部タテハケ、肩部凹線25 条。以下山形文、胴部下半タテミガキ、内面:口縁部 ・頸部ミガキ、胴部ヨコハケ 縦方向強いナデ	にぶい黄褐色	密	良好	胴部外面黒斑
54	第24図 PL.27	SI1 床面直上	須恵器 蓋坏坏身	口径:13.4 器高: 3.6	口縁部 1/8周	外面:ヨコナデ 底面回転ケズリ 内面:ヨコナデ	青灰色	密 径2mm以下の 砂粒やや多く混	良好	
55	第26図 PL.27	SI3 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径:10.8 器高: 3.6	口縁部 1/6周	外面:ヨコナデ ケズリ 内面:ヨコナデ	灰白色	2mm角以下の白色 砂礫まばらに混	良好	
56	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 14.1 器高: 4.3	口縁部 3/4周	外面:天井部1/3回転ケズリ、以下回転 ナデ 内面:天井部不整ナデ、以下回転ナデ	灰色	密	良好	
57	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径:14.8 器高:4.5	口縁部 一部欠	外面:天井部回転ケズリ、口縁部 回転ナデ 内面:回転ナデ、天井部不整ナデ	灰色	径1mm以下の白色 砂粒やや多く混	良好	八橋 期 (TK209)
58	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径:14.4 器高:3.9	ほぼ 完存	外面:天井部回転ケズリ、口縁部 回転ナデ 内面:回転ナデ	灰色	径2mm以下の砂礫 まばらに混	良好	口唇部内面に浅い洗線1 条 八橋 期(TK209)

No.	挿図・P.L.	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
59	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径:12.3 器高:4.0	ほぼ 完存	外面:天井部1/8切り離し ナデ、以下 回転ナデ 内面:天井部ヨコナデ、以下回転ナデ	灰白色	密	良好	
60	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	器高: 3.2	天井部 1/8周	外面:天井部回転ケズリ。天井部 と口縁部の境に沈線2条。以下回 転ナデ 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	
61	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	器高: 3.0	天井部 ほぼ完存	外面:天井部回転ケズリ、以下回転ナ デ 内面:天井部ヨコナデ、以下回転ナデ	灰色	密	良好	外面自然釉
62	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 13.0 器高:2.7	口縁部 1/2周	外面:天井部2/3回転ケズリ、口縁部回転ナ デ 内面:天井部不整ヨコナデ、以下回転ナデ	灰色	密	良好	外面天井部赤 彩痕(記号カ)
63	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 11.8 器高:3.9	口縁部 1/2周	外面:回転ナデ、底部1/5回転ケズリ 内面:回転ナデ、底部不整ナデ	灰色	密	良好	底部須恵器片 溶着
64	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 11.1 器高:4.2	口縁部 1/2周	外面:口縁部~底部2/3回転ナデ、以下回転 ケズリ 内面:回転ナデ、底部ヨコナデ	灰色	密	良好	底部外面自然 釉
65	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 12.2 器高: 3.3	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	灰色	密	良好	
66	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 甕	器高: 7.1 胴部:8.8	胴部 完存	外面:肩部~中位力キ目、中位波状文。以下 回転ケズリ ナデ 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	中位円形孔
67	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 有蓋高坏蓋	つまみ径:3.3 器高: 1.7	つまみ 部破片	外面:回転ナデ 内面:ナデ	灰色	密	良好	
68	第28図 PL.27	SI6 埋土中	須恵器 無蓋高坏	口径:13.3 器高:17.4 底径:11.2	完存	外面:口縁部回転ナデ2段の境間に波状文。底部回転ナデ。 脚部方に2段方形透孔。中に沈線2条。回転ナデ 内面: 坏部回転ナデ、底部不整ナデ、脚部回転ナデ	灰色	密	良好	脚部外面自然 釉
69	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 有蓋高坏	口径: 13.0 器高: 5.1	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	灰色	密	良好	
70	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 高坏	器高: 7.2	脚部 1/8周	内外面:回転ナデ	灰白色	密	良好	透孔2箇所以 上
71	第28図 PL.27	SI6 埋土中	須恵器 甕	口径: 22.3 器高: 7.6	口縁部 1/8周	外面:口縁部回転ナデ、肩部平行叩き 内面:口縁部回転ナデ、肩部同心円文 当て具痕	灰色	密	良好	
72	第28図 PL.30	SI6 埋土中	須恵器 甕	口径: 22.8 器高: 5.8	口縁部 1/8周	外面:口縁部~頸部回転ナデ、肩 部平行叩き 内面:回転ナデ	灰白色 暗灰色	密	良好	内面自然釉
73	第28図 PL.27	SI6 埋土中	土師器 甕	口径:15.1 器高:22.6 最大径:21.3	ほぼ 完存	外面:口縁部ヨコナデ、胴部粗いハケ 内面:口縁部ヨコナデ、胴部斜上方向 ケズリ	黄橙~ にぶい黄橙色	密	やや不良	胴部外面全体に 煤付着。底部付 近二次的被熱
74	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 12.9 器高: 6.8	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ ミガキ 内面:口縁部ミガキ、頸部以下上方向ケズリ	黄橙色 灰色	密	良好	内面黒斑
75	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 18.5 器高: 3.8	口縁部 1/8周	内外面:ヨコナデ	浅黄橙色	密	良好	
76	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 15.2 器高: 3.7	口縁部 1/8周	内外面:ヨコナデ	浅黄橙色	密	良好	
77	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 11.0 器高: 5.7	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ 内面:口縁部横ミガキ、頸部以下右方向 ケズリ	にぶい橙色 灰白色	密	良好	頸部付近に刺 突痕あり
78	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 10.0 器高: 10.0 胴部径: 13.6	口縁部 1/3周	外面:口縁部~胴部最大径付近ヨコナ デ、以下横ミガキ 内面:口縁部~頸 部ヨコナデ、頸部以下左方向ケズリ	にぶい赤褐色~褐色 浅黄色~にぶい褐色	密	やや不良	口縁部~頸部 内面赤彩
79	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 20.0 器高: 11.4	口縁部 1/4周	外面:胴部タテハケ、口縁部~肩部ナ デ 内面:口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ	にぶい褐色	径2mm以下の砂礫 雲母粒多く混	やや不良	
80	第28図 PL.27	SI6 埋土中	土師器 甕	口径:16.9 器高: 9.8	口縁部 ほぼ完存	外面:胴部タテハケ 口縁部ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	径3mm以下の 砂礫多量に混	良好	
81	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 23.0 器高: 7.2	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部以下タテ ヨコハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下左方向ケズリ	浅黄色	やや粗、2mm 大の砂粒混	良好	
82	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 18.5 器高: 6.9	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ケズリ	橙色	密、2~5mm 大の礫混	良好	外面煤付着
83	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 17.8 器高: 6.4	口縁部 1/8周	外面:ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部以下 右方向ケズリ	橙色	密	良好	
84	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 9.0 器高: 9.8	口縁部 1/8周	外面:タテハケ 内面:頸部ヨコナデ以下左方向ケズリ	浅黄橙色	密	良好	外面全体煤付 着。一部赤変。
85	第28図 PL.29	SI6 埋土中	土製紡錘車	長軸:2.6 短軸:2.5 厚さ:2.4	一方の 端部欠	手捏ね整形 ナデ、斜めに穿孔	浅黄橙色	密	良好	
86	第28図	SI6 埋土中	縄文土器 精製浅鉢	器高: 3.2	口縁部 破片	外面:LR縄文、沈線で連弧状のモチ ーフを描く 内面:ナデ	浅黄色	密、径1mm以下の 砂礫まばらに混	良好	後期中葉~後葉 (元住吉山式併行)
87	第30図 PL.28	SI6周辺 表土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 13.1 器高:4.0	口縁部 3/4周	外面:回転ナデ、底部1/5回転ケズ リ 内面:回転ナデ、底部不整ナデ	明緑灰色 灰白色	密	良好	外面自然釉
88	第30図 PL.28	SI6周辺 表土中	須恵器 蓋坏坏身	口径:11.2 器高:3.2	ほぼ 完存	外面:底部回転ケズリ、口縁部回 転ナデ 内面:回転ナデ	灰色	径1mm以下の白色 砂粒やや多く混	やや不良	八橋 期 (TK209)

No.	挿図・P.L.	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
89	第30図 PL.29	SI6周辺 表土中	須恵器 甕	口径: 11.8 器高: 3.4	口縁部 1/6周	外面:回転ナデ、沈線1条 内面:回転ナデ	暗灰色 灰黄色	密	良好	中位円形孔 外面自然釉
90	第30図 PL.29	SI6周辺 表土中	須恵器 甕	器高: 11.4 胴部径:10.2	胴部 完存	外面:頸部～胴部最大径付近回転 ナデ、肩部沈線1条。 胴部下半力キ目 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	中位円形孔 外面自然釉
91	第30図 PL.28	SI6周辺 表土中	須恵器 有蓋高坏	口径: 15.6 器高:5.0 つまみ径:2.6	口縁部 2/3周	外面:天井部力キ目、以下回転ナデ 内面:回転ナデ	灰白色	密	良好	天井部円形柱 状つまみ
92	第30図 PL.28	SI6周辺 表土中	須恵器 有蓋高坏	口径: 13.3 器高: 5.0	受け部 完存	外面:口縁部～坏部中位回転ナデ、 以下力キ目 内面:回転ナデ、底部ヨコナデ	灰白～灰色 灰白色	密	良好	
93	第30図 PL.30	SI6周辺 表土中	土師器 甕	口径:23.4 器高:12.3	頸部 1/4周	外面:胴部タテハケ、口縁部ヨコ ナデ 内面:口縁部ヨコハケ、ヨ コナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	径2mm以下の 砂粒多く混	やや不良	口縁部外面に 煤付着
94	第30図 PL.29	SI6周辺 表土中	土師器 甕	口径: 16.2 器高: 6.6	口縁部 1/6周	外面:口縁部ヨコナデ、胴部タテ ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、屈 曲部以下右方向ケズリ	浅黄橙色	密	良好	
95	第30図 PL.29	SI6周辺 表土中	土師器 甕	口径: 19.3 器高: 7.5	口縁部 1/6周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテ ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、屈 曲部以下ケズリ ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	密	良好	内外面化粧土
96	第30図 PL.27	SI6周辺 表土中	土師器 甕	口径:16.6 器高: 4.9	口縁部 3/4周	外面:胴部タテハケ、口縁部ヨコ ナデ 内面:口縁部ヨコハケ、ヨ コナデ、頸部以下ケズリ	橙色	径1mm以下の白 色砂粒多く混	やや不良	
97	第30図 PL.29	SI6周辺 表土中	土師器 甕	口径: 14.9 器高: 6.1	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテ ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、屈 曲部以下ケズリ	浅黄橙色	密	良好	
98	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 15.6 器高: 2.7	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	橙色	密、径2mm以下 の砂粒多く混	不良	焼成は土師器 に近い
99	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径:14.9 器高:6.6 底径:6.7	口縁部 一部欠	外面:底部回転ケズリ、口縁部回 転ナデ 内面:回転ナデ	灰色	密、径2mm以 下の砂粒多く混	良好	
100	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 13.1 器高:4.5 底径: 6.7	口縁部 1/2周	外面:天井部外周ケズリ、以下回 転ナデ 内面:回転ナデ	にぶい橙色	密、径約1mmの 砂粒まばらに混	不良	焼成は土師器 に近い
101	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径:12.0 器高:3.6 底径:6.5	口縁部 一部欠	外面:底部外周ケズリ、以下回転 ナデ 内面:回転ナデ	暗灰色	密、2mm以下 の砂粒多量に混	良好	底部ヘラ切り 未調整
102	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 瓶	口径: 14.0 器高: 5.2	口縁部 1/8周	内外面:ヨコナデ	灰白色	密、径1mm以下 の石英まばらに混	良好	
103	第32図 PL.30	SD10 埋土中	土師器 甕		底部 破片	外面:本体際ハケ、他板ナデ 内面:板ナデ	浅黄橙色	密、2mm以下 の砂粒まばらに混	やや不良	
104	第32図 PL.30	SD10 埋土中	土師器 甕	長: 5.3 幅:6.5	把手部 破片	外面:器壁際ハケ、他ナデ 内面:縦ケズリ	にぶい黄橙色	密、雲母粒混	良好	
105	第32図 PL.30	SD10 埋土中	土師器 甕	器高: 7.5	底部 破片	外面:ハケ 内面:ケズリ	浅黄橙色	密、2mm大の 砂粒少量混	良好	外面下部に刺突 文、底部板目痕か
106	第35図 PL.40	SI2 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 2.3	口縁部 破片	外面:RL磨消縄文 内面:ナデ	にぶい黄色 暗灰黄色	密、径2mm以下 の砂粒まばらに混	良好	中津式
107	第35図 PL.40	SI2 埋土中	縄文土器 精製鉢		胴部 破片	外面:RL縄文、ミガキ 内面:ミガキ	黄褐色 暗灰黄色	密、径2mm以下 の砂粒やや多く混	やや不良	中津式
108	第35図 PL.40	SI2 埋土中	縄文土器 深鉢		胴部 破片	外面:C字爪形文（一部連続爪形 文）3段 内面:ナデ	橙色 にぶい黄橙色	密、径2mm以下の石英、 雲母粒やや多く混	不良	前期中葉（北白 川下層 a式）
109	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 碗	口径: 12.8 器高:5.3	口縁部 1/3周	外面:ヨコハケ ナデ 内面:ヨコハケ ナデ タテミガキ	橙色	密、径1mm以下 の砂粒微量混	良好	内外面赤彩
110	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 坏	口径: 14.6 器高:3.9 底径: 5.1	口縁部 1/5周	内外面:回転ナデ	橙色～褐灰色 橙色～浅黄橙色	密、径2mm以下の赤 褐色砂粒僅かに混	良好	底部回転系切
111	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 皿	口径:8.8 器高:2.3 底径:4.8	完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	橙色	密、径約1mmの赤 褐色砂粒僅かに混	良好	底部回転系切
112	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 皿	口径:8.0 器高:1.9 底径:4.3	口縁部 一部欠	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	橙色	密、径3mm以下 の赤褐色砂粒少量混	良好	底部回転系切
113	第35図 PL.35	SI2 床面直上	土師器 皿	口径:8.2 器高:2.3 底径:4.0	口縁部 一部欠	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい橙色	密、径3mm以下 の赤褐色砂粒少量混	良好	底部回転系切
114	第35図 PL.42	SI2 埋土中	白磁 碗	口径: 10.0 器高: 2.0	口縁部 1/8周	内外面:施釉	灰白色	密、精良	良好	
115	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 坏	器高: 2.1 底径:6.8	底面 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい橙色	密、径2mm以下の赤褐 色、白色砂粒僅かに混	良好	底部回転系切
116	第37図 PL.31	P1 掘方埋土	土師器 皿	底径: 6.2 器高: 1.1	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	にぶい赤褐色	密	良好	底部回転系切
117	第37図 PL.31	P18 掘方埋土	土師器 鍋	器高: 1.7	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色 ～ 橙色	密	良好	内外面に赤彩
118	第37図 PL.31	P13 埋土中	青磁 碗	器高: 2.4	口縁部 破片	内外面:施釉。貫入あり 外面:ヘラ描き連 弁文、弁端には下に重複する割付線あり	施釉部:オリーフ黄色 露胎部:灰白色	密	良好	龍泉窯系
119	第37図 PL.31	P10 掘方埋土	瓦質土器 鍋	器高: 1.5	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	灰色 灰白色	密	良好	
120	第37図 PL.31	P2 掘方埋土	土師器 底部	底径: 7.5 器高: 6.5	底部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色～ 灰褐色	密	良好	底部回転系切
121	第37図 PL.31	P13 埋土中	土師器 底部	底径: 6.8 器高: 1.8	底部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色 ～ 灰白色	密	良好	
122	第37図 PL.31	P24 掘方埋土	須恵器 胴部	胴部径: 18.4 器高: 4.3	胴部 1/8周	外面:格子叩き ヨコナデ 内面:底 部寄りユビオサエ 胴部タテハケ	灰色	密	良好	勝間田焼もし くは龜山焼

No.	挿図・P.L.	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
123	第42図 PL.31	SB2 P9 掘方埋土	土師器 皿	器高:1.8	底部-口縁 部1/4周	外面:側縁に沿ったヨコナデ 側 縁を内側に軽く折り曲げる 内面:ナデ	橙色～褐灰色	密	良好	底部回転系切 耳皿か
124	第42図 PL.31	SB2 P13 埋土中	土師器 底部	底径: 5.9 器高: 1.4	底部 1/4周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
125	第42図 PL.31・42	SB2 P17 掘方埋土	陶器		胴部 破片	外面:施釉、横位沈線1条の下位に 円形の剥離痕 内面:施釉	灰オリーブ色 浅黄色	密	良好	褐釉陶器 水注か
126	第44図 PL.31・42	SD1 溝底直上	須恵器 坏	口径: 10.6 底径: 7.5 器高:4.2	口縁部 1/4周 底部 1/2周	外面:回転ナデ、底部ナデ 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	底部系切、底部外面・見 込み・底部破面に朱墨付 着、見込みに墨付着
127	第44図 PL.31	SD1 埋土中	須恵器 坏	口径:12.4 器高:3.3	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	灰色	密	良好	
128	第44図 PL.31	SD1 埋土中	須恵器 鉢	口径:12.6 器高:8.7	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	灰色～灰白色 灰色	密	良好	
129	第44図 PL.31.42	SD1 埋土中	須恵器 底部高台	底径: 12.4 器高: 2.1	底部 1/6周	内外面:回転ナデ	灰色	密、白色砂 粒混	良好	底部系切、底部外面 高台内に朱墨付着
130	第44図 PL.31	SD1 埋土中	須恵器 底部高台	底径:9.0 器高: 2.9	底部 3/4周	外面:回転ナデ 内面:ナデ	灰色	密、2mm程度の 砂粒僅かに混	良好	底部外面中央 にヘラ記号か
131	第44図 PL.31	SD1 埋土中	土師器 坏	口径:12.8 底径:9.2 器高:4.0	ほぼ 完存	外面:回転ナデ、底部ナデ 内面:ヨコナデ	橙色	密、2mm程度の 砂粒僅かに混	良好	内外面赤彩、 底部ヘラ切り
132	第44図 PL.31	SD1 埋土中	土師器 坏	口径: 13.7 底径: 9.8 器高:2.8	口縁部 1/6周	内外面:ヨコナデ	にぶい橙色	密、2mm程度 の砂粒少量混	良好	内外面赤彩、 底部ヘラ切り
133	第44図 PL.31	SD1 埋土中	土師器 甕	口径: 22.0 器高: 5.2	口縁部 1/6周	外面:ヨコナデ 一部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下 ケズリ	灰黄色 にぶい黄色	密、2mm程度 の砂粒混	やや不良	外面一部に煤 付着
134	第44図 PL.31	SD1 埋土中	土師器 底部高台	底径: 13.6 器高: 1.9	底部 1/8周	外面:ヨコナデ 内面:ナデ	にぶい黄橙色	密	良好	見込み部に黒 班
135	第44図 PL.32	SD6 埋土中	須恵器 高台坏	口径: 11.8 底径: 8.7 器高:4.0	口縁部 1/8周 底部 1/3周	内外面:回転ナデ	灰色	密	良好	底部回転系切、 ただし不明瞭
136	第44図 PL.32	SD6 埋土中	須恵器 高台坏	口径: 13.0 底径: 9.0 器高:4.5	口縁部 1/8周 底部 1/4周	内外面:回転ナデ	灰白色	密	やや不良	底部回転系切、 ただし不明瞭
137	第44図 PL.32	SD6 埋土中	須恵器 皿	口径: 15.2 底径: 10.4 器高:2.2	口縁部 1/8周 底部 1/4周	内外面:回転ナデ	灰色	密、2mm大の砂 粒少量混	良好	底部回転系切
138	第44図 PL.32	SD6 埋土中	須恵器 底部	底径: 11.4 器高: 4.7	底部 1/3周	外面:ナデ 内面:底部ユビオサエ ヨコナデ	灰白色	密	良好	底部ヘラ切りか
139	第44図 PL.32	SD6 埋土中	土師器 坏	口径: 12.8 器高: 2.7	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	浅黄色	密	良好	底部ヘラ切り
140	第44図 PL.32	SD6 埋土中	土師器 皿	器高: 1.1	口縁部 破片	外面:ナデ 一部ミガキ 内面:ナデ	浅黄色	密	良好	全面赤彩
141	第44図 PL.32	SD6 埋土中	土師器 甕	口径: 36.6 器高: 6.6	口縁部 破片	外面:ヨコナデ 内面:口縁部ヨコ ナデ、頸部以下ケズリ	黄灰色 浅黄色	密	やや不良	外面に黒班、頸部外 面に少量の煤付着
142	第45図 PL.33	SD7 埋土最下層	須恵器 高台坏	口径: 13.6 底径: 9.4 器高: 4.2	口縁部 1/8周 底部 1/6周	内外面:回転ナデ	灰白色	密	良好	底部回転系切、 ただし不明瞭
143	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	須恵器 坏	器高: 3.2	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	灰色 灰白色	密	良好	口縁部下に工 具による沈線
144	第45図 PL.33	SD7 埋土中層	須恵器 坏	器高: 3.4	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	灰白色	密	不良	
145	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	須恵器 壺	器高: 3.5	口縁部 破片	内外面:ヨコナデ	灰色	密	良好	内外面に自然釉、 外面口縁下に沈線
146	第45図 PL.33	SD7 埋土下層	須恵器 坏蓋	口径: 13.4 器高: 4.3	口縁部 1/8周	内外面:ヨコナデ	灰色	密	良好	
147	第45図 PL.33	SD7 埋土中層	須恵器 底部高台	底径: 13.2 器高: 2.2	底部 1/4周	外面:回転ナデ、胴部下半ケズリ 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	底部回転系切、高 台内に鉄分付着
148	第45図 PL.42	SD7 埋土上層	白磁 碗	器高:2.2	口縁部 破片	内外面:ヨコナデ	灰白色	密	良好	
149	第45図 PL.42	SD7 埋土上層	白磁 碗	底径: 6.0 器高: 2.9	底部 1/2周	外面:ケズリ 一部ナデ 内面:ナ デ、見込み部ユビオサエ	灰白色	密	良好	胴部下半内外 面に沈線
150	第45図 PL.34	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径:8.6 底径:4.8 器高:2.0	完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、2mm大の赤 色粒少量混	良好	底部回転系切
151	第45図 PL.34	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径:8.5 底径:4.5 器高:2.4	完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、1mm大の赤 色粒少量混	良好	底部回転系切
152	第45図 PL.34	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径:7.9 底径:4.2 器高:2.1	完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、1mm大の赤 色粒少量混	良好	底部回転系切
153	第45図 PL.34	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径:9.5 底径:4.6 器高:2.6	完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、1mm大の赤 色粒僅かに混	良好	底部回転系切
154	第45図 PL.33	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径: 8.4 底径: 5.6 器高:1.3	口縁部 1/6周 底部 1/3周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色	密、1mm大の赤 色粒僅かに混	良好	底部ヘラ切り
155	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	土師器 皿	口径: 8.6 底径: 7.0 器高:1.0	口縁部 1/8周 底部 1/8周	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色	密、1mm大の赤 色粒少量混	良好	底部ヘラ切り
156	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	土師器 坏	口径: 13.7 器高: 3.0	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	橙色	密、2mm大の砂 粒僅かに混	やや不良	外面に煤付着

No.	挿図・P.L.	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
157	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	土師器 坏	口径: 8.2 器高: 2.1	口縁部- 底部1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい黄褐色	密、1mm大の赤色粒僅かに混	良好	底部へラ切り 底部押圧 ナデ
158	第45図 PL.33	SD7 埋土下層	土師器 坏	器高: 3.5	口縁部 破片	内外面:ミガキ、一部ハケ	にぶい黄褐色	密	良好	底部内面に少量の鉄分付着
159	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	土師器 柱状高台皿	底径:7.7 器高:3.5	底部 ほぼ完存	外面:回転ナデ、一部工具によるナデ 内面:回転ナデ	灰褐色 にぶい橙色	密、1-3mm大の赤色粒混	良好	底部回転系切
160	第45図 PL.33	SD7 埋土中層	土師器 底部	底径:6.7 器高: 1.7	底部 完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、1-3mm大の赤色粒混	良好	底部回転系切、打ち欠きか
161	第45図 PL.34	SD7 埋土中	土師器 鍋	口径: 30.8 器高: 12.2	口縁部 1/8周	内外面:ハケ 一部ナデ	明黄褐色	密	やや不良	
162	第45図 PL.34	SD7 埋土中	土師器 甕	口径: 25.4 器高: 9.6	口縁部 1/8周 胴部 1/4周	内外面:ハケ 一部ナデ	灰黄褐色 浅黄色	密、3mm大の砂粒多量に混	良好	外面に多量の煤付着
163	第45図 PL.34	SD7 埋土上層	土錘	長さ:3.9 幅:1.7 孔径:0.5 重量:9g	ほぼ 完存		橙色	密	良好	
164	第45図 PL.34	SD7 埋土上層	弥生土器 胴部	器高: 3.3	胴部 破片	外面:ナデ、上部に横位沈線1条 内面:ナデ	黄橙色	密	良好	外面にへラ描き、絵画か
165	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 皿	口径: 10.6 器高:1.8	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	
166	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 皿	口径: 9.0 器高:1.8	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	浅黄褐色 淡橙色～橙色	密	良好	内外面に煤付着
167	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 鍋	器高: 3.6	口縁部 破片	外面:頸部タテハケ、口縁部ヨコハケ 内面:口縁部斜めハケ、ヨコハケ、頸部ヨコハケ	にぶい褐色 にぶい黄褐色	密	良好	
168	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 甕	器高: 4.4	口縁部 破片	外面:ヨコナデ 内面:ヨコハケ 口縁部ヨコナデ	橙色	密	良好	外面煤付着
169	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 底部	底径: 4.8 器高: 1.3	底部 ほぼ完存	内外面:回転ナデ	明褐色 橙色	密	良好	外面赤彩 底部回転系切
170	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 羽釜		鏝部 破片	内外面:ナデ	橙色	密	良好	外面煤付着
171	第47図 PL.42	SD4 検出面	白磁 碗	器高: 2.5	口縁部 破片	内外面:施釉、貫入あり	灰白色	密	良好	
172	第47図	SD4 埋土中	白磁 碗	器高: 1.9	口縁部 破片	内外面:施釉	灰白色～ 淡黄色	密	良好	
173	第47図 PL.42	SD4 埋土中	白磁 碗	底径: 3.6 器高: 1.0	底部 1/4周	外面:施釉、底部ケズリ 内面:施釉	灰白色	密	良好	
174	第47図 PL.34	SD4 埋土中	瓦質土器 脚部		脚部 破片	表面:ケズリ ナデ	褐灰色	密	良好	煤付着 五徳・脚釜・ 脚鍋等の脚部か
175	第47図 PL.34	SD4 埋土中	不明土製品	器高: 2.5		ケズリ ナデ 不規則なミガキ	赤褐色	密	良好	
176	第47図 PL.34	SD4 埋土中	土錘	長さ:4.3 幅:1.3 孔径:0.4 重量:7.7g	完存	側面:タテケズリ ナデ 端面:ケズリ	暗灰色	密	良好	
177	第49図 PL.42	SD5 埋土中	青磁 碗		胴部 破片	外面:蓮弁文、施釉 内面:花文、施釉	オリーブ灰色 オリーブ黄色	密	良好	龍泉窯系
178	第49図 PL.42	SD8 埋土中	白磁 碗	器高: 2.0	口縁部 破片	内外面:施釉、貫入あり	灰白色	密	良好	
179	第49図 PL.35	SD8 埋土中	土師器 底部	底径: 5.0 器高: 1.3	底部 1/3周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色 淡橙色	密、1mm大の砂粒混	やや不良	底部回転系切、ただし不明瞭
180	第49図 PL.35	SD9 埋土中	縄文土器 深鉢		胴部 破片	外面:押し引き状のC字爪形文5段 内面:ナデ	暗灰黄色	密、径1mm以下の砂礫、角閃石多く混	不良	前期中葉 (北白川下層 a-b)
181	第49図 PL.35	SD9 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 13.2 器高: 2.2	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	灰白色	密	良好	
182	第49図 PL.34	SD9 埋土中	須恵器 長頸壺	底径: 8.2 器高: 4.8	底部 3/4周	外面:回転ナデ、胴部下半ケズリ 内面:回転ナデ	暗灰色 灰色	密	良好	
183	第49図 PL.35	SD9 埋土中	須恵器 高坏		脚基部 破片	外面:回転ナデ 内面:ナデ	灰色	密	良好	三方向の長方形透孔
184	第49図 PL.35	SD9 埋土中	土師器 甕	口径: 27.6 器高: 4.9	口縁部 1/8周	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、頸部以下ケズリ	にぶい褐色	密、2mm大の砂粒多く混	やや不良	
185	第49図 PL.35	SD9 埋土中	土師器 甕	口径: 14.8 器高: 3.7	口縁部 1/6周	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄褐色	密、1mm大の砂粒混	良好	
186	第49図 PL.35	SD9 埋土中	土師器 甕	口径: 17.0 器高: 4.2	口縁部 1/8周	外面:ヨコナデ、頸部ハケ 内面:ヨコナデ、頸部以下ケズリ	にぶい橙色	密、2mm大の砂粒少量混	やや不良	
187	第52図 PL.36	SK1 埋土中	土師器 皿	口径: 8.4 器高: 1.8	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	橙色	密、赤褐色砂礫、角閃石やや多く混	良好	
188	第52図 PL.36	SK1 埋土中	土師器 坏	器高: 1.6 底径:4.4	底部 完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、赤褐色砂礫多く混	良好	底部回転系切
189	第52図 PL.36	SK1 埋土中	土師器 柱状高台皿	器高: 4.2 底径: 7.4	底部一 部欠	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい橙色～ 橙色	密、赤褐色砂礫、角閃石やや多く混 白色砂粒多く混	やや不良	底部回転系切
190	第58図 PL.42	SK5 埋土中	白磁 碗	器高: 4.0 底径:5.6	底部 完存	外面:施釉、底部周辺露胎、回転ケズリ 内面:施釉	灰白色～ 淡黄色	密、灰白色微砂粒混	良好	

No.	挿図・P.L.	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
191	第58図 PL.38	SK5 埋土中	土師器 皿	器高:1.2	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色 橙色	密	良好	底部回転糸切
192	第58図 PL.38	SK6 埋土中	土師器 坏	口径: 14.0 器高:3.7	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色	密	良好	底部回転糸切 内面に煤付着
193	第58図 PL.38	SK6 埋土4層	土師器 底部	底径: 8.4 器高: 2.0	底部 1/4周	内外面:回転ナデ	黒褐色 灰黄褐色	密	良好	底部回転ヘラ 切り
194	第58図 PL.38	SK6 埋土3層	土師器 底部	底径: 6.6 器高: 1.1	底部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央を不定 方向の仕上げナデ	灰黄褐色 明赤褐色	密	良好	底部回転糸切
195	第58図 PL.38	SK3 埋土中	土師器 底部	器高: 0.9 底径: 6.4	底部 1/5周	内外面:回転ナデ	灰褐色	密 赤褐色砂 礫やや多く混	良好	底部回転糸切
196	第60図 PL.38	SK7 埋土中	土師器 皿	口径: 7.4 器高:2.1	底部 1/3周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転糸切 内外面赤彩
197	第60図 PL.42	SK7 埋土中	白磁 碗	器高: 3.7	口縁部 破片	内外面:施釉	浅黄色	密	良好	
198	第60図 PL.42	SK7 埋土中	白磁 碗	器高: 3.5	口縁部 破片	内外面:施釉、貫入あり	灰白色	密	良好	
199	第63図 PL.37	SK9 坑底直上	土師器 羽釜	口径: 22.2 器高: 9.0	口縁部 1/8周	内外面:口縁部ヨコナデ、胴部板 ナデ	灰褐色	2mm角の石英、 金雲母多量に混	やや不良	
200	第66図 PL.36	SK10 埋土中	土師器 皿	口径:9.1 器高:2.8	ほぼ 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	にぶい黄橙色～ にぶい褐色橙色	密	良好	外面に煤付着、底部 回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
201	第66図 PL.36	SK10 埋土中	土師器 皿	口径: 8.9 器高:2.5	口縁部 2/3周	内外面:回転ナデ	灰黄褐色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
202	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 皿	口径: 9.1 器高:2.6	口縁部 1/2周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	橙色	密	良好	外面に赤彩あり、底 部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
203	第66図 PL.36	SK10 埋土中	土師器 皿	口径:8.5 器高:4.3	完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	にぶい黄褐色	密	良好	内外面に煤付着、底 部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
204	第66図 PL.36	SK10 埋土中	土師器 皿	口径:8.8 器高:2.6	ほぼ 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ、ユビオサエも残る	暗灰黄色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
205	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 皿	口径: 8.7 器高:2.0	口縁部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	橙色	密	良好	外面赤彩、底部回 転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
206	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土師器 坏	口径: 15.0 器高: 4.5	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	にぶい褐色～ にぶい橙色	密	良好	内外面赤彩
207	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 坏	口径: 14.2 器高: 4.0	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色	密	良好	
208	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:6.8 器高: 2.2	底部ほ ぼ完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央をさら に回転による仕上げナデ	浅黄褐色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
209	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:6.5 器高: 1.4	底部ほ ぼ完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	橙色	密	良好	底部回転糸切
210	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:6.1 器高: 1.8	底部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	にぶい橙色 橙色	密	良好	内外面赤彩、底部 回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
211	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径: 6.0 器高: 2.2	底部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	橙色	密	良好	底部回転糸切
212	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径: 5.6 器高: 2.1	底部-胴部 1/5周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転糸切
213	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:6.2 器高: 1.9	底部 2/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面 中央をさらに回転による仕上げナデ	橙色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
214	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:4.2 器高: 1.4	底部 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央をさら に回転による仕上げナデ	橙色	密	良好	内外面赤彩、 底部回転糸切
215	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 柱状高台皿	底径:6.3 器高: 2.8	底部 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央をさらに回転による仕上 げナデ 棒状工具による沈線	橙色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
216	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土師器 鉢	器高: 6.2	口縁部 破片	外面:横方向のミガキ 内面:胴部下半をタテナデ、上半 ～口唇部をヨコナデ	にぶい橙色 橙色～黒褐色	密	良好	内外面とも風 化著しい
217	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土師器 甕	器高: 7.5	口縁部 破片	外面:胴部不定方向のハケ、頸部タテハ ケ、口唇部ヨコナデ 内面:胴部～口縁 部ヨコハケ、胴部一部不定方向のハケ	にぶい橙色	密、1-3mm大の 白色砂粒多く混	良好	
218	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土師器 甕	器高: 3.9	口縁部 破片	外面:頸部斜めハケ、タテナデ消し、部分的にヨ コナデ、胴部タテハケ、口唇部ヨコナデ 内面: 頸部～胴部斜めハケ、ヨコナデ、口縁部ヨコナデ	にぶい橙色～灰褐色 浅黄褐色	密	良好	外面に煤付着
219	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土錘	長さ:3.5 幅:4.5 孔径:1.0 重量: 35.6 g	全体 1/2	側面:ナデ、ユビオサエ 端面:ナデ	黒褐色	密、1-5mm大の 白色砂粒多く混	良好	片面穿孔
220	第66図 PL.37	SK11 埋土中	土師器 皿	口径: 12.4 器高:2.7 底径: 9.0	口縁部 1/4周	外面:回転ナデ、底部ケズリ 内面:回転ナデ	橙色	密、白色微砂粒、 角閃石少量混	良好	摩滅著しい
221	第69図 PL.38	SK11 埋土中	土師器 底部	器高: 0.5 底径: 5.2	底部 1/2周	外面:回転ナデ 内面:(剥離)	灰褐色 淡橙色	密、赤褐色砂礫 僅かに混	良好	底部回転糸切
222	第69図 PL.37	SK12 埋土中	須恵器 坏	口径: 20.4 器高: 3.0	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	青灰色	密、径1mm以下の 砂礫僅かに混	良好	混入か
223	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 皿	口径: 9.3 器高:2.9 底径:4.7	口縁部 1/4周 底部 完存	外面:回転ナデ 内面:ナデ	浅黄褐色	密、雲母粒 混	やや不良	底部回転糸切
224	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 皿	口径:9.2 器高:2.6 底径:4.2	ほぼ 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	浅黄褐色～ 橙色	密、雲母粒 少量混	良好	底部回転糸切

No.	挿図・P.L.	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
225	第69図 PL.36	SK12 坑底直上	土師器 皿	口径:9.3 器高:2.4 底径:4.3	口縁部 一部欠	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	浅黄橙色	密、径2mm以下の 砂礫やや多く混	良好	底部回転系切、 口縁部歪みあり
226	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 皿	口径: 8.5 器高:2.7 底径:4.3	口縁部 3/4周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	浅黄橙色～ 橙色	密、精良	良好	底部回転系切、 口縁部歪みあり
227	第69図 PL.38	SK12 埋土中	土師器 坏	器高: 2.0 底径: 7.2	底部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	密、砂粒僅 かに混	良好	底部回転系切 底面 に歪に胎土を貼り足 し一度目の系切
228	第69図 PL.38	SK12 埋土中	土師器 皿	口径: 9.8 器高:2.4 底径: 5.0	底部 1/4周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	浅黄橙色	密	良好	底部回転系切
229	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 柱状高台皿	器高: 3.3 底径: 7.2	高台部 3/4周	内外面:回転ナデ	にぶい褐色	密、3mm角の 礫まばらに混	良好	底部回転系切
230	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 柱状高台皿	器高: 3.5 底径: 6.0	底部 1/2周	外面:回転ナデ 内面:ナデ	浅黄橙色	密、砂粒少 量混	良好	底部回転系切
231	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 柱状高台皿	器高: 2.5 底径:5.6	底部ほ ぼ完存	内外面:回転ナデ	浅黄橙色	密、雲母粒 僅かに混	良好	底部回転系切
232	第72図 PL.37	SK13 埋土中	須恵器 甕	底径: 22.4 器高: 10.7	底部・胴部 1/6周	外面:格子叩き 回転ナデ 内面:底部～胴部タテハケ 胴部 無文当て具痕	灰色	密	良好	
233	第72図 PL.38	SK13 埋土中	土師器 皿	口径: 7.2 器高: 1.5	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
234	第72図 PL.42	SK13 埋土中	青白磁 合子	口径: 5.8 器高: 1.8 受部径: 6.8	口縁部 1/8周	内外面:施釉、受部は露胎	明緑灰色 露胎部分は灰白色	密	良好	
235	第72図 PL.38	SK14 埋土中	土師器 皿	口径: 7.8 器高:1.6 底径: 4.4	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色 橙色	密、砂粒、雲母 粒やや多く混	不良	外面煤付着 底部回転系切
236	第75図 PL.37	SK15 P2 埋土中	須恵器 甕		頸部・肩部 1/6周	外面:肩部格子叩き ヨコナデ、 頸部タテハケ ヨコナデ 内面:ヨコハケ 回転ナデ	灰色	密	良好	
237	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 坏	口径: 12.3 器高: 4.5	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	密	良好	
238	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 皿	口径: 6.8 器高:1.8	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
239	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 皿	口径: 7.8 器高:1.6	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	にぶい黄褐色	密	良好	底部回転系切
240	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 皿	口径: 8.4 器高:1.5	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色	密	良好	
241	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 底部	底径:4.0 器高: 1.0	底部 完存	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
242	第75図 PL.38	SK18 埋土中	土師器 坏	口径: 13.0 器高: 3.8	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	明褐色	密	良好	内外面に煤付着
243	第75図 PL.38	SK18 埋土中	土師器 皿	口径: 7.2 器高:1.2	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
244	第75図 PL.38	SK18 埋土中	土師器 底部	底径:4.9 器高: 1.5	底部ほ ぼ完存	内外面:回転ナデ	にぶい橙色 浅黄色	密	良好	内外面赤彩 底部回 転系切、側面に打欠 き痕らしき破面残る
245	第75図 PL.38	SK18 埋土中	土師器 底部	底径:5.2 器高: 1.2	底部 2/3周	内外面:回転ナデ	浅黄橙色 橙色	密	良好	内外面赤彩 底部回転系切
246	第78図 PL.38	SK21 埋土中	土師器 坏	口径: 15.0 器高:3.4	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	黄褐色	密、1mm大 の赤色粒混	良好	内外面煤付着
247	第78図 PL.38	SK21 埋土1層	土師器 底部	底径: 7.6 器高: 1.0	底部 1/6周	内外面:回転ナデ	黄橙色	密	良好	底部回転系切、 ただし不明瞭
248	第78図 PL.38	SK21 埋土1層	土師器 底部	底径: 6.8 器高: 1.2	底部 1/2周	内外面:回転ナデ	橙色	密	やや不良	底部回転系切、 外面煤付着
249	第80図 PL.38	SK22 埋土1層	土師器 坏	器高: 2.7	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	黄橙色	密、1mm大 の赤色粒混	良好	外面煤付着
250	第80図 PL.38	SK22 埋土1層	土師器 底部	底径: 8.4 器高: 1.5	底部 1/8周	内外面:回転ナデ	黒褐色 橙色	密、1mm大の 赤色粒混	良好	底部ヘラ切り
251	第80図 PL.38	SK22 埋土1層	土師器 底部	底径: 5.8 器高: 1.1	底部 1/8周	内外面:回転ナデ	橙色	密、1mm大の赤 色粒少量混	良好	底部ヘラ切り
252	第83図 PL.37	P91 埋土中	土師器 坏	口径: 16.2 器高:4.5 底径:7.0	口縁部 1/4周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	灰褐色	密、赤褐色砂 礫まばらに混	良好	底部回転系切
253	第83図 PL.37	P127 埋土中	土師器 皿	口径:8.1 器高:2.0 底径:4.5	完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	橙色	赤褐色砂礫 まばらに混	良好	底部回転系切、 板圧痕
254	第83図 PL.37	P367 埋土中	土師器 皿	口径: 8.1 器高:2.2 底径: 5.0	口縁 2/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	橙色～ 明赤褐色	密、雲母粒 やや多く混	良好	底部回転系切
255	第83図 PL.37	P367 埋土中	土師器 皿	口径:8.1 器高:1.5 底径:6.7	完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい黄褐色	密、白色砂 粒少量混	良好	底部回転系切
256	第83図 PL.42	P422 埋土中	白磁 碗	口径: 14.0 器高: 4.8	口縁部 1/6周	外面:ケズリ 施釉 内面:施釉	灰白色	密、精良	良好	
257	第83図 PL.42	P371 埋土中	白磁 碗	器高: 3.3 底径: 6.4	底部 1/3周	外面:施釉、高台・底面は露胎 内面:八ケ 施釉	灰白色	密、精良	良好	
258	第83図 PL.42	P351 埋土中	青白磁 合子蓋	口径:5.2 器高:1.5	天井部 1/2周	外面:側縁に蓮弁、天井に陽刻草花 文、施釉 内面:天井部のみ施釉	灰白色	密、精良	良好	内面露胎部に 赤色顔料付着

No.	挿図・P.L.	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
259	第86図 PL.41	C5 表土中	土偶	長: 6.1 幅: 3.6 厚さ: 4.3	脚部 破片	正面上部に隆帯、隆帯の上下は沈線で区画し、沈線の末端に刺突。隆帯上にLR縄文。隆帯の上方には、同様に沈線で区画された右上がりの隆帯の痕跡あり。右側面にLR縄文 平行沈線2条。上段の沈線と隆帯区画沈線との交点に刺突。下段沈線は隆帯区画沈線の末端から伸び、終端に刺突。刺突は計6箇所となる。上段沈線の上方に赤彩残る。下端近くに沈線1条をめぐらせ足首を表現。上端背面側は滑らかな球状の剥離面となっており、接合の技法が窺える。色調はにぶい黄褐色。胎土は白色砂粒をやや多く含み、雲母粒や角閃石が少量混じる。焼成は良好。				
260	第86図 PL.41	B8 表土中	不明土製品	長: 3.7 幅: 2.0 厚さ: 1.7		平坦な側にRL縄文、縦の沈線1条。上面に刺突3箇所（端部近くに2箇所、沈線の末端に1箇所）	灰黄褐色	密、白色砂粒や多く混	良好	
261	第86図 PL.40	B3 表土中	縄文土器 深鉢		胴部-底部 破片	外面: D字形爪形文 2段 内面: ナデ	にぶい黄褐色 褐灰色	密、微砂粒、雲母粒や多く混	不良	前期中葉（羽鳥下層 - 北白川下層）
262	第86図 PL.40	C5 攪乱土中	縄文土器 深鉢	器高: 2.8	口縁部 破片	外面: RL磨消縄文、施文帯の上下に円形刺突、それを沈線で結ぶ 内面: ミガキ	にぶい黄褐色 暗灰黄色	密、径1mm以下の砂礫や多く混	不良	中津式
263	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 4.4	波頂部 破片	外面: LR磨消縄文、波頂部に刻み5単位 内面: ミガキ	にぶい黄褐色	密、径2mm以下の砂礫や多く混	不良	中津式
264	第86図 PL.40	B4 攪乱土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 4.3	波頂部 破片	外面: 波状口縁。RL磨消縄文 内面: ミガキ	にぶい黄褐色	密	良好	外面黒斑
265	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 8.6	波頂部 破片	外面: RL磨消縄文 内面: ミガキ	にぶい黄褐色	密、雲母粒や多く混	良好	外面煤付着 中津式
266	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 4.5	口縁部 破片	外面: 波状口縁。LR磨消縄文 内面: ミガキ	灰黄褐色 浅黄褐色	やや粗、2mm 大の砂粒混	良好	
267	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 6.2	波頂部 破片	外面: 波状口縁。RL磨消縄文。 内面: 丁寧ナデ	浅黄褐色	密	良好	
268	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 粗製深鉢	器高: 3.5	口縁部 破片	外面: 条痕、口唇部に細かい刻み 内面: 条痕	灰黄褐色	密、径2mm以下の石英雲母粒や多く混	やや不良	外面煤付着 中津式
269	第86図 PL.40	C10 攪乱土中	縄文土器 鉢		胴部 破片	外面: LR磨消縄文、沈線内に刺突 内面: ナデ	にぶい黄褐色	密、白色砂粒や多く混	良好	中津式
270	第86図 PL.39	B7 表土中	弥生土器 壺	口径: 14.3 器高: 18.4	上半部 1/4周	外面: ミガキ 内面: ナデ、ユビオサエ	にぶい黄褐色	密、1-2mm大赤褐色粒子混	良好	上面煤付着
271	第86図 PL.40	F9 -5層	弥生土器 甕	器高: 3.3	口縁部 破片	外面: 口縁端部刻み。以下板状工具による凹線 内面: 横ミガキ	橙色	密	良好	
272	第86図 PL.40	B4 攪乱土中	弥生土器 甕	器高: 3.0	口縁部 破片	外面: 粗いたテハケ 3条以上凹線。 内面: 端部ミガキ。以下ハケ。	橙色	やや粗、2mm 大の砂粒混	良好	外面黒斑
273	第86図 PL.40	F10 -5層	土師器 甕	口径: 13.3 器高: 3.7	口縁部 1/8周	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	にぶい黄褐色	密	良好	
274	第86図 PL.40	F10 攪乱土中	土師器 鼓形器台	口径: 23.6 器高: 6.8	受け部 1/8周	外面: ヨコナデ 円形スタンプ文、 半截竹管を組み合わせたスタンプ文 内面: ヨコナデ	浅黄褐色	密	良好	
275	第86図 PL.40	G9 表土中	土師器 鼓形器台	口径: 19.4 器高: 7.0	受け部 1/5周	外面: ヨコナデ 内面: 横ミガキ	浅黄褐色	密	良好	
276	第86図 PL.37	C9 表土中	土師器 甕		底部 のみ	上面: ナデ胴部付近ユビオサエ 下面: 端部ハケ、胴部付近ユビオサエ	浅黄褐色	密	良好	
277	第86図 PL.37	C10 攪乱土中	土製紡錘車	長軸: 2.9 短軸: 2.8 厚さ: 2.35	完存	手捏ね整形 ナデ	にぶい黄褐色	密	良好	
278	第86図 PL.40	層	土器片転用 紡錘車	長径: 2.8 短径: 2.8 厚さ: 0.36	完存	外面: ナデ 内面: ハケ	にぶい橙色 黄褐色	密	良好	土器胴部片を円形に加工。焼成前に穿孔か
279	第86図 PL.37	B8 表土中	土錘	長: 4.4 重量: 7.7g 幅: 1.4 厚さ: 1.4	完存	手捏ね整形	暗灰色	密	良好	
280	第86図 PL.40	D8 表土中	土師器 甕	口径: 26.0 器高: 5.7	口縁部 1/8周	外面: 口縁端部ヨコナデ、胴部非常に粗いたテハケ 内面: 口縁部ヨコハケ ナデ、屈曲部以下ケズリ	にぶい黄褐色	密	良好	
281	第86図 PL.37	B8 表土中	土師器 甕		把手部 破片	外面: 手捏ね整形 内面: ケズリ	灰褐色 にぶい橙色	密	良好	外面黒斑あり
282	第86図 PL.37	F9 -5層	須恵器 坏蓋	口径: 12.8 器高: 4.0 稜径: 12.8	口縁部 3/4周	外面: 天井部1/2回転ケズリ、以下回転ナデ 天井部との境に鈍い稜 内面: 天井部ヨコナデ、以下回転ナデ	灰色	密	良好	
283	第86図 PL.40	F9 -5層	須恵器 短頸壺	口径: 11.7 器高: 4.4	口縁部 1/8周	内外面: 回転ナデ	灰白色	密	良好	
284	第86図 PL.39	C7 層	須恵器 壺	口径: 18.4 器高: 32.9 底径: 9.3	口縁部- 胴部1/2周	外面: ナデ、底部ケズリ 内面: 頸部ハケ ナデ	黒灰色	1mm以下の砂粒混	良好	
285	第86図 PL.40	F9 -5層	須恵器 底部高台	器高: 2.6 底径: 7.3	底部 1/8周	内外面: 回転ナデ	暗灰-にぶい赤褐色 灰色	密	良好	
286	第86図 PL.40	E10 攪乱土中	須恵器 高台付皿	口径: 21.0 器高: 4.0 底径: 15.0	口縁部 1/8周	内外面: 回転ナデ	黄灰色	密	良好	口縁部に意図的な打ち欠きか
287	第86図 PL.42	表土中	白磁 碗	口径: 15.8 器高: 2.6	口縁部 1/6周	内外面: 回転ナデ	灰白色	密	良好	
288	第86図 PL.40	E10 表土中	瓦質土器 底部	器高: 4.4	底部 1/8周	外面: 胴部回転ナデ、底部ケズリ 内面: ヨコハケ	灰色	密	良好	胴部下半突帯あり
289	第87図 PL.39	攪乱土中	須恵器 甕	器高: 36.8	胴部 1/5周	外面: 平行叩き 内面: 同心円文当て具痕	灰色	密	良好	

第33表 石器・石製品観察表

No.	遺構・層位	挿図・PL.	器種	法量 (mm)			重量(g)	石 材	備 考
				長さ	幅	厚さ			
S1	SI5 埋土中	第9図 PL.44	石皿	332	240	98	9600	黒雲母角閃石安山岩	
S2	SI5 床面直上	第9図 PL.44	石皿	242	130	97	2600	黒雲母角閃石安山岩	
S3	SI5 床面直上	第9図 PL.44	磨石	109	94	55	801	角閃石安山岩	端部が黒く変色
S4	SI5 埋土中	第9図 PL.44	磨石	120	104	58		黒雲母角閃石安山岩	
S5	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	26	17	3	1.1	安山岩	無茎凹基
S6	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	22	15	3	0.6	黒曜石	無茎凹基(基部片方欠)
S7	SD2 埋土上層	第13図 PL.44	打製石鏃	22	16	5	1.0	黒曜石	無茎凹基(基部片方欠)
S8	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	17	13	3	0.4	安山岩	無茎凹基
S9	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	16	11	2	0.2	安山岩	無茎凹基
S10	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	18	15	3	0.7	安山岩	無茎凹基
S11	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	14	12	3	0.3	安山岩	無茎凹基
S12	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	15	13	3	0.4	安山岩	無茎凹基
S13	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	16	13	3	0.5	安山岩	無茎凹基
S14	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	13	13	3	0.2	黒曜石	無茎凹基
S15	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	15	12	4	0.5	安山岩	無茎平基
S16	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	15	11	2	0.4	安山岩	無茎平基
S17	SK20 埋土中	第19図 PL.44	石鋸	55	23	3	8.0	石英片岩	
S18	SI6 埋土中	第29図 PL.44	打製石鏃	27	21	4	1.5	安山岩	無茎凹基
S19	SI6 埋土中	第29図 PL.44	打製石鏃	16	15	4		黒曜石	
S20	SI6 埋土中	第29図 PL.44	砥石	45	24	17	34	砂岩	
S21	SI2 埋土中	第35図 PL.44	砥石	87	44	34	182	流紋岩	
S22	SI2 埋土中	第35図 PL.44	礫	165	186	45	2250	花崗岩	表・裏面中央付近に朱付着 端部に打ち欠き痕、片面に朱付着後敲打痕
S23	SD1 埋土中	第44図 PL.44	剥片石器	89	73	13	92	安山岩	直線的な側縁は風化した自然面
S24	SD1 埋土中	第44図 PL.44	打製石鏃	15	11	3	0.4	安山岩	無茎凹基
S25	SD1 埋土中	第44図 PL.44	打製石鏃	16	15	4	0.6	黒曜石	無茎凹基
S26	SD7 埋土上層	第45図 PL.44	砥石	40	27	17	23	無斑晶安山岩	
S27	SK18 埋土中	第75図 PL.44	砥石	76	53	48	288	細粒花崗岩	
S28	P258 埋土中	第83図 PL.44	石庖丁	94	43	7	48	角閃石花崗閃緑岩	
S29	D5 表土中	第87図 PL.44	石鋸	67	20	3	8.0	結晶片岩	
S30	D5 表土中	第87図 PL.44	片刃石斧	90	26	11	47	ガラス質安山岩	
S31	F9 表土中	第87図 PL.44	磨製石斧	55	54	26	110	アブライト	

第34表 玉類観察表

No.	遺構・層位	挿図・PL.	材 質	種 類	法量 (mm)	特 徴	備 考
J1	SD 2 埋土下層	第13図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：8.1 幅：10.6 厚：4.2	厚さ4.2mmの板状素材から1辺4mm四方の角柱体を形成する過程で廃棄されたもの。上面と縁辺に施溝痕が残る。小口を研磨。施溝の裏面(自然面)が剥離し、厚みが不足したために廃棄されたものか。	分析番号94446 菩提、女代南B群
J2	SD 2 埋土下層	第13図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：12.7 幅：5.4 厚：4.6	厚さ4.6mmの板状素材から施溝分割によって成形された幅5.4mmの角柱体。縁辺に施溝痕が残る。側面のうち1面は施溝分割の後に押圧剥離を行う。	分析番号94447 菩提、女代南B群
J3	SD 2 埋土下層	第13図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：14.0 幅：7.1 厚：5.9	角柱体。側面は4面とも打割によって成形され、研磨される。	分析番号94451 菩提、女代南B群
J4	C5表土中	第87図 PL.43	翡翠	勾玉未成品?	長：3.1 幅：3.4 厚：1.0	縁辺に施溝痕が残る。施溝痕と直交する幅広側の1辺は破断面。他は自然面となる。	
J5	表土中	第87図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：13.6 幅：6.6 厚：5.4	側面と小口の縁辺に施溝痕が残る角柱体。側面のうち1面と小口面が研磨される。	
J6	表土中	第87図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：19.1 幅：9.0 厚：7.8	厚さ7.8mmの板状素材から、施溝分割によって角柱体を成形する過程で破損したものの。縁辺に施溝痕が残る。破断面にも調整や研磨が行われており、再加工を試みたものか。	

第35表 銅製品観察表

No.	遺構・層位	挿図・PL.	種 類	法 量	特 徴
C1	SB 1 : P1掘方埋土	第37図 PL.43	銭貨	径2.5cm	開元通寶(唐・621年初鑄)
C2	SB 1 : P5掘方埋土	第37図 PL.43	銭貨	径2.5cm	至道元寶(北宋・995年初鑄)草書
C3	SB 1 : P8掘方埋土	第37図 PL.43	銭貨	径2.5cm	元祐通寶(北宋・1086年初鑄)行書
C4	SB 1 : P11掘方埋土	第37図 PL.43	銭貨	径2.4cm	元豊通寶(北宋・1078年初鑄)行書
C5	SK 2 埋土中	第54図 PL.43	和鏡	径8.1cm 厚さ：外区5mm 鏡胎1~2mm	山吹双鳥鏡。二羽の鳥と二輪一對の山吹を描く。鈕座は抜菊座。内区と外区の境に界圈巡る。